古し発句　つ

和書門
類 七八六五 號
七九 函
一 架
三六 冊

内閣文庫
和書 類
七八六五 號
三六 冊
二〇一 函
七 架

内閣文庫
番號	和 7865	
冊數	36（13）	
函號	201	87

つ

続千載上　吉野山花をわけて行人の　つきさへにかゝる花のしら雲　中宮

新拾雑上　夜山の峰のはれてゆく　つきさへにかゝる峰の月　後普光園院摂政

月清集上　とこ世かけ旅の衣や初霜の　つきさへにかゝる露かな

風雅夏　夕立の雲もとまらぬ夏の日の　つきさへかたむく山の端　院御製

新古秋下　秋風の袖にかはらぬ宿の　つきさへにけて宿かる秋の　藤原家隆朝臣

同　吹まよふ峰の嵐のはらふ　つきさへにわかるゝ秋の袖　皇太后宮大夫俊成女

壬生二百首　身にしみし袖の別の時の　つきさへ出て待つゝ

風雅冬　みむろ山枯木の梢に風さえて　つきさへもふかく鳥の声　院一条

須磨　心あらば雲井にひゞく　つきさへ都へ下る道に逢ふて

壬生二百首　月清み松の木の間も白妙に　つきさへさらにふかき緑

風雅雑中　夕日影田面もはるかに　つきさへ山の端にかゝる　太上天皇

新勅秋下　わかの浦に千鳥なく　つきさへ秋風ぞふく　従二位家隆

風雅秋中　衣手に秋もしるき　つきさへやどす露の玉　大納言公重

玉葉冬　秋の夜の月のひかりの　つきさへ霜の木の葉　後西園院摂政

新後秋上　霧晴る山のはの　つきさへにともなふ月は　土御門院御製

風雅恋上　夕暮の風のまよひに　つきさへもはかなくて　伏見院御製

拾玉集五　おりやらぬみちのしるべとなりぬらん　つねにはしらぬこゝろなりけれ
山家集下　いつのまにながくゆめさめて　つねにはいとゞ法の道にも
同上　たゞはなちて枝をつらぬ霧かな　つきのかげにもこゝろうつして
玉葉釈教　時のまにおもひをさめぬる衣かな　つとめて見ればよそに見えけり　前大納言為家
拾遺哀傷　極楽ははるけきほどとききしかど　つとめていたる所なりけり　仙慶法師
千載釈教　極楽へまだわがこゝろゆきつかず　つとめてかへる家なかりけり　空也上人
詞花雑下　極楽のまへにて佛よむ声は　つとめてはてぬ命なりけり　よみ人しらず
新拾遺哀傷　あさましの法のみちにもまよふかな　つとめてのちにおもふなりけり　少僧都源信
新古今哀傷　さくらばな白雲なびく空にして　つとめてきゝし花とこそ見れ　前大僧正慈圓
拾玉集四　いかならむちりの雪のつもりけん　つもりつもりて松のえだ
月清集下　くもりなき心のうちにやどるかな　つもりてのちぞなかりける
拾遺愚草上　いかにせん姫にとめてもあるにはあらず　つもりつもりのいろのやまかな
拾玉集二　衣のいろにたゞそめぬるのりの　つもりにし露の風にゆられて
同三　衣のいろ染めてなるかひもなし　つゆのまにてや衣かたしく
新葉雑下　なにごとをおもひし命のこゝろよ　つゆのかけの心なきさまも　中務卿宗尊親王
風雅雑下　秋のよにかはるつゆしも伊勢の海に　つゆのひとへの袖にやどりて　崇徳院御製
新拾遺　今日も又浦風あれて波のまに　つゆのおもひを何とかへらん　平宣時朝臣
伊勢物語　塩竃にいつかきにけん朝なぎに　つゆすまぬ色のなかりけり

後拾遺雑上　塩浦にいつかきませる朝なぎに　つゆすがるまでいかでかはある　業平朝臣
壬生二条上　あさぢふの宿のかれ野のすゝきにも　つゆすがるあまの袖をだにぬらす
新古雑下　浪あらき嵐の山風の吹くまに　つゆすがるあまの袖いとゞぬらす　後人寺入道
拾遺愚草中　涼しさや桜かゝるるしをさむ風　つゆすがるあまの袖とこそみれ
壬生二条下　まちえたるおもひの月のくもるかな　つゆすがる海士の袖こそみれけれ
新拾遺秋　さらぬだにおもへば海もおもふらん　つゆすがる床のあけがたの空　前大僧正慈勝
壬生二条下　君が代は千年の松のちよの色　つゆすがる海士も賎もゆかん
同中　吉野山一夜とまりのやどなれど　つゆすがる人の袖ぞそみる
拾玉集五　いつくしき山のはの月影を　つゆのやどりを何となるらん
長秋詠藻上　あはれむかしの月のよの秋もあらで　つゆ林にのこる袖のうへかな
後拾遺秋　いかにせん年の暮の山のはに　つゆもやどらぬ袖の露けさ　前大僧正慈鎮
新勅撰釈教　とにかくにたのむかげなきこの世を　つゆもやどらぬ身をなげきつゝ　寂超法師
拾玉集四　露もちりなむ風のよそにて　つゆもやどらぬ山の下のかげ
後拾遺哀傷　いにしへのことのみしのぶ宿のうちに　つゆもおもひのあらはれやせん　法橋大命
新千載哀傷　今はまたおもひすつべき世ならねば　つゆもありける此暁の空　後小一条
拾遺雑賀　松の木のかげにもまちてあかず　つゆもおもはぬ身をもつくす　元輔
新勅撰物名　秋の夜のながきためしにひくなれど　つゆもちりけるとかのなげきを　二条太皇太后宮大弐
後拾遺賀　千世をへてまつの葉もみえぬらん　つゆもまだひぬ千年をぞふる　赤染衛門

新古今哀傷　[illegible]　つ[illegible]　[illegible]
同誹諧　君いくよ命いかにぞ秋の[illegible]　つゐのほとりに[illegible]　右少[illegible]
拾玉集四　大和路や[illegible]　つゐの[illegible]あはせて[illegible]
新千載四　[illegible]　つかぬとも[illegible]　後鳥羽院御製
続後拾遺冬　我[illegible]　つもれる[illegible]　郁芳門院安芸
続衣二　独ぬる[illegible]　つもれ[illegible]　大納言公実
新千載三　うちとけぬ[illegible]氷　つもれ[illegible]　源有房
新続古今雑中　今[illegible]　つ[illegible]　久負公
玉葉雑四　別路[illegible]　つ[illegible]　入道前太政大臣
新勅撰賀　[illegible]　つ[illegible]　升[illegible]
風雅雑上　[illegible]　つ[illegible]山里　入道前内大臣
新後撰雑　今も[illegible]　つゐ[illegible]　正三位為実
続後拾遺雑上　後は[illegible]　つゐて[illegible]　冷泉入道前右大臣
新葉冬　[illegible]　つゐ[illegible]　前大納言為家
新続古今雑中　いつきん関の[illegible]　つ[illegible]　前大納言為氏
新千載雑上　[illegible]　つ[illegible]　[illegible]
風雅同下　[illegible]　つ[illegible]　如願法師

新拾冬　かりくらの[illegible]　つもれ[illegible]　権大納言[illegible]
壬生二百上　くれは[illegible]　つもれる雉子[illegible]
拾遺恩三　かりて[illegible]　つね[illegible]　よみ人しらず
拾遺愚草上　いつ[illegible]　つ[illegible]　源[illegible]
新続古今一　[illegible]　つ[illegible]　延喜御製
新古今三　あつ[illegible]　つ[illegible]　権中納言公雄
新拾誹諧　大井河[illegible]氷の[illegible]　つ[illegible]　[illegible]
続拾雑上　[illegible]三笠山　つ[illegible]
拾遺愚草上　神もみよかもの川[illegible]　つ[illegible]　前大納言[illegible]
風雅秋上　[illegible]秋の女郎花　つ[illegible]
新葉雑下　今[illegible]東[illegible]　つ[illegible]　前光[illegible]
拾遺員外上　[illegible]　つ[illegible]
新千雑中　[illegible]　つ[illegible]　右大臣
新葉雑下　[illegible]　つ[illegible]関の[illegible]川　入道前太政大臣
山家集下　[illegible]　つ[illegible]
新勅雑一　[illegible]　つ[illegible]　従二位家子
拾玉集五　[illegible]　つ[illegible]
風雅神祇　[illegible]　つ[illegible]　権大納言公蔭

拾玉集四　ひとりのみ[illegible]　つれなき松をよそにみるかな　前大僧正慈鎮
風雅雑上　[illegible]松の[illegible]　つれなくひとりふる人の秋　達智門院
新千載賀　[illegible]松の風　つれなくちよの[illegible]　後京極院
同　代々をへて住よし山の松の風　つれなくも世の[illegible]　皇太后宮大夫俊成
新勅撰一　[illegible]の杜の木の[illegible]　つれなくやせまほり[illegible]　度会行忠
続千載神祇　[illegible]　つれなくていつまで[illegible]人　権僧正[illegible]
新続古今賀　かくてこそ[illegible]　つれなくの[illegible]　[illegible]
続千載神祇　我国は[illegible]　つれなくの[illegible]　[illegible]
千載哀傷　[illegible]　つれなくの[illegible]　[illegible]
続古今羇旅　風[illegible]　つれなくの[illegible]　山部赤人
拾遺恋上　[illegible]の山[illegible]　つれなく[illegible]　[illegible]
新続古今羇旅　宇津の山[illegible]　つれなく[illegible]秋風[illegible]　後京極摂政太政大臣
山家集上　[illegible]　つれなく[illegible]　[illegible]
拾遺恋上　[illegible]　つれなく[illegible]　[illegible]
万葉十上　[illegible]　つれなく[illegible]　皇太后宮大夫俊成
新続古今三　[illegible]　つれなく[illegible]報[illegible]　宗久法師
新万葉四　[illegible]　つれなく[illegible]　後村上院御製
万葉十四　[illegible]夕暮[illegible]　つれなく[illegible]　従一位教良女

新勅撰羇旅　[illegible]　つれなく[illegible]　藤原信実朝臣
万葉十一下　[illegible]　つれなく[illegible]　式子内親王
続古今三　[illegible]　つれなく[illegible]　前太政大臣
壬生二巻上　[illegible]　つれなく[illegible]
拾遺貞巻上　[illegible]　つれなく[illegible]
壬生二巻中　[illegible]月の[illegible]　つれなく[illegible]秋の白露
続古今又　[illegible]　つれなく[illegible]　前大納言資季
新古今四　[illegible]　つれなく空の月[illegible]　太上天皇
続古雑上　[illegible]月[illegible]雲[illegible]　つれなく[illegible]　衣笠内大臣
月清集下　[illegible]松の[illegible]　つれなく[illegible]
壬生二巻下　[illegible]　つれなく[illegible]白雪
新古今上　朝日[illegible]山[illegible]　つれなく[illegible]雪[illegible]　藤原元家朝臣
拾遺恋中　[illegible]　つれなく[illegible]金
新古今上　[illegible]　つれなく[illegible]雪
壬生二巻下　[illegible]　つれなく[illegible]の[illegible]　権中納言[illegible]信
拾遺恋巻下　[illegible]　つれなく[illegible]
壬生二巻上　[illegible]夕暮[illegible]秋風[illegible]　つれなく[illegible]
続後拾遺三　[illegible]　つれなく[illegible]　権中納言公宗

新続古恋上　まれにても雪げの氷はかはるらん　つれなくあかつきにけりしかあれ　崇光院御製
新後夏　まがきにも秋をしらずさく花を　つれなくすぎし郭公かな　前大納言為世
玉葉恋一　逢までとおもふたのみを命にて　つれなくもなほながらへてまつ　前大納言基良
新後拾雑下　ながらへば行末頼むおもひあれや　つれなくさへもなほのこるらん　前大納言実教
新古今羇旅　忘れなん人もこそあれ風の音も　つれなくうきは秋の夜の月　橘為仲朝臣
玉葉恋一　わすられぬ思ひを人のしらせばや　つれなき人のこゝろすさまじ　前参議雅有
同恋三　うきとのみおもひつゞけてくらすかな　つれなくさそふことのはをまつ　前関白太政大臣
新拾雑中　住わびて世をうきものとしる人の　つれなくてもまだながらへて　二条院御製
新千恋二　妹とこしひとりの浦にたゞひとり　つれなくて猶こひわたるかな　土御門院御製
続後撰恋三　金沢のよそにみし浜松がえに　つれなくてとしふることをいかにせん　後嵯峨院御製
続古恋二　いかにせん人もながめぬ秋の月　つれなくとも人をまつのかげ　衣笠前内大臣
続後撰冬　吹よわる嵐のおとにたえだえの　つれなくて山の陰にすむ人　前内大臣
新千恋四　まちつけて片山陰の夕暮の　つれなくて時雨ふりにし　後西園寺入道前太政大臣
続千恋二　柞葉のもとの下ばに秋風の　つれなくも見えし人のなげき　前大納言為氏
壬生二下　吉野川たえずもかはる秋の空　つれなく今はなほぞかはらぬ　津守国冬
新後恋二　浦風のふきしく浜の松がえに　つれなくもなほしげる世の　常盤井入道前太政大臣
新千恋三　有明の月もさやけき秋の夜を　つれなく人のかへるさはうき　皇太后宮大夫俊成
新後雑上　有明の月はさながらありながら　つれなくきえしあかつきの空　権大納言公宗

大和物語　思ひもかけぬ人をまつかな　つれなくもあかつきのことのは　今上御製
壬生二下　あやなく川ちかきなかになりて　つれなくてさへかはらぬ人のこゝろ　権大納言季
新続古恋一　人ごころあまの釣舟ゆくへなく　つれなくかはるさまのうき　太閤
続千夏　在明の月のはかげの郭公　つれなくもなほなくね聞かばや　権大納言実家
同　時鳥なかぬ夜もなき郭公　つれなくとかるかりねの山　大納言実宗
新古恋二　夕されば荻の葉むけの風の音に　つれなくもあかつきの袖　右近大将道家
風雅恋　人ごゝろきえなばよしやあだ人の　つれなさもいかにせんとて　民部卿為家
続古恋二　秋山の松のこずゑに吹風に　つれなくて世をすぐすかな　入道前太政大臣
新葉恋三　ことわりの松をとはれぬ命までも　つれなくなりぬる夕暮の空　前大納言
新勅恋一　吉野川たゆまぬ水に影みえて　つれなき人のこゝろならねば　従二位家隆
新拾恋二　さりともとおもふこゝろのひくかたに　つれなくつれなき人ぞまちわぶ　後京極摂政前太政大臣
新葉恋二　ながき夜の月の山もや年ふれど　つれなくていまも待べき　法印定円
続千恋二　あはれなる人の心のかはるとも　つれなくいかで我身なるらん　左近衛権中将経家
新後恋二　うき物とおもひしられぬ世の中に　つれなくながらへつる月　前大納言為氏
新続古恋二　いかばかり我がまつ夜半のかねの音に　つれなくてなほ初声の　藤原為之
新続古雑中　思ひやるかたもなき身の山の　つれなくとも人の昔をしのぶ　前大納言為世
風雅冬　雪やふる雲の間より山の端に　つれなく見えて世をすごす　後伏見院御製
続後撰冬　雪ふりてたれかはとはむ松の葉の　つれなき山の年ふかく　従二位家隆

新続古今冬　竜田山梢のもみち秋くれて　つれなきまつに松そのこれる　後光厳院御製
玉葉冬　ふかきぬる時雨もいまはかれはてゝ　つれなきまゝの時雨なりけり　慈道法親王
月清集上　下葉は秋をもみちにて　つれなきさえ松に時雨ふる山
新葉冬　散かゝる木の葉の色のみえけれは　つれなき松をもえてみるかな　関白左大臣
拾玉集三　今もなほ秋のもみちは時雨にて　つれなき色はまつにかはらて
後拾遺三　思ふ人もこそあれなかきさなから　つれなき色もみえすやあらん　小弁
続後拾遺三　涙のみ何とおもふも松のたかさを　つれなきことはかれもぬれけれ　中務卿宗尊親王
拾遺愚草上　さらぬたにかはるまてのつれなきを　つれなきさまにたえぬさかりを
壬生二家下　ありあけのつれなくみえし別より　つれなき人のまたもはつれり
千載三一　ありて後をさへ岩の波かゝる　つれなさものにしるゝなみた哉　待賢門院堀河
拾遺雑賀　恋しなはたかなのたかにとて　つれなき人をなそかしの世　よみ人しらず
後撰三六　かゝるとそぬかたいつきなきを絶すらん　つれなき人にわかみさへ　同
拾遺三一　あしひきの山はさへそ　つれなき人もさやうかは　同
拾遺愚草上　さきにけるうなかせのさかりをそふるを　つれなき人にすかりつゝ
後拾遺三三　逢みてのちまてさへ涼しくなかれ　つれなきよりもまさるへき　永縁法師
新続古今三　みをきて何をはさみにほかをおもひ　つれなきさきをなつらん　前大納言為家
続後撰三二　かくしてのあはむかたもなきものを　つれなきひとをもはむのさかりて　源家長朝臣
拾遺雑三　君こそはつれなきものを　つれなき人をみまもるかな　よみ人しらず

古今恋一　こんよりもやかてなかなかにこひわたる　つれなきひとをこひしもの思へ　よみ人しらず
後撰恋三　よそにしてありつゝもなかをやめん　つれなき人を恋しとも思ふ　同
続古今恋二　恋つゝもさりとも思ひてかはらぬ　つれなきくさの色にさりとも　前参議雅経
古今恋五　いつはりもなきもなをこそまてつれ　つれなきことをなをしかもせし　僧正遍昭
続古今恋二　あはれともさそもしらはこそつれなき　つれなき人をみるもあるへし　元良親王
壬生二家上　住吉の松の風にたえすこそ　つれなき人を恋しかるらん
金葉恋上　さりともやかはらんかと頼みける　つれなき人を恋ひわたるかな　長実卿母
後撰恋一　いかにかくあはれなるをもつらからん　つれなき人はこのよなりけり　よみ人しらず
拾遺雑恋　いかなる山をか雲にへたてゝ　つれなき人をとひもせて　平定文
続拾遺恋一　みかさね待ちはあれとも思ふ人の　つれなさをそふるはかなきそ　前大納言公宗
[illegible]　ことの葉も袖もしほれはかなしきを　つれなき人をみまくほしさに
玉葉恋三　おもひつゝかはらてあれと身にしみて　つれなき人をはかなしと思ふ　前参議[illegible]妻
千載恋三　恋しさも命も絶えはなくて　つれなき人のそてのうれなく　俊恵法師
続拾遺恋三　思ひきやすむにひとはちかふとて　つれなき人の果をまちつゝ　永成法師
千載恋二　一かたにいはんかたなくなりにけり　つれなき人のかはりゆくへく　平[illegible]盛朝臣
拾遺雑恋　なかれてもなほつまりにしもせす　つれなき人のこころをもちて　よみ人しらず
伊勢物語　逢はてのつれなきものゝ何にかは　つれなき人の命なからん
詞花恋上　あはれとも思はぬものをいかにして　つれなき人の情なからん　隆縁法師

後拾遺巻一　こひしさを事にそへてやなぐさめし　つれなくもなほ世をすぐすかな　永源法師
新後拾遺巻二　散りなんのちぞおもはれむ梅の花　つまなき人の見てもおもはん　能因法師
続後拾遺巻三　数ならぬ身の程しらぬ我袖も　つまならぬ人のこひしのみや　贈従三位為子
古今巻六　白雪の行きてつもれる年月に　つまぐさのはなのいかならむ　素性法師
後拾遺巻一　としくれてまたぬ山のさくらばな　つれなきをゆめのかよひぢなり　右大臣
山家集上　天くだる神の事の葉の言の葉を　つれなき人のけふも来てみん
古今巻二　月影にわが身をかふるものならば　つまなきは人にもあはでこそ見え　たゞみね
詞花巻上　むかしおもふ草のいほりの夜の雨に　つれなくもまたあひみぬはこそ　右京行家
金葉巻上　花すゝき何に心のうつるらむ世の中川　つまなきのはるもさきかへりをき　よみ人しらず
続古今巻六　志らぬ秋のなかのつきのあはれをば　つれなきは人も聞かぬなるらん　前太政大臣
新後拾遺巻三　かくばかりうき身の程もしらぬ人の　つまなきをもう待つなるものの音　後嵯峨院御製
続古今巻二　年ふればうつりかはれる事とも　つれなくてのみすぐしつかへり　民部卿顕頼
続後撰雑　世中よつれなきみちのぬれる松かも　つまなきをのみ我身とぞなる　右京大夫信範
続古今　たのめぬを人のことのはまちて郭公　つれなくてのみあらむくさのはな　衣笠内大臣
続後撰雑　世中にわれよりほかに人もなし　つれなくておのが月にけるかな　前参議雅経
風雅巻六　いつとてもかはらぬ物を思ふかな　つまなくもとふまくもかなと　伏見院御歌
拾遺巻上　あひみてののちの心にくらぶれば　つれなくもとおもふ心にそなへ　ねみ
新勅撰巻二　ふるさとのくもゐの月のあかぬかな　つれなくてもゆくべくもあらん　殷富門院大輔

千載巻二　あかなくにちりぬる花のなごりをば　つれなくても見てもなほあかなく　能因法師
新後拾遺巻上　吹く風の涼しきままに志ら雲の秋風に　つれなくてぞからる山の端の月　津守国久
古今雑体　秋風のふくにつけてもとはぬかな　つまにさせてやさりしもの　在原元方
新千載巻一　さゞなみや志賀の浦風吹くからに　つゆながら見てしきむ中の月　後光厳院入道大納言
壬生二家集下　あれはてて人もかよはぬふるさとに　つゆ草も神のうつりしあめ
風雅巻一　さはらびのもゆる春日の野辺ならん　つゆけき人の雪ぞもゆる　嵯峨院一条
拾玉集六　わびつゝも人の心をあはれとや　つゆ秋は涼しきよみの
新後拾遺巻一　ありのままに見る人もなき梅の花　つゆながらぞうつりそめしに　唯円法師
新千載巻一　かくなくてたゞあはれなるふる郷に　つゆのうへにもたえずさきけれ　素暹法師
金葉巻上　つれなさのむかしわすれぬ心より　つゆにそへてうつりゆくらむ　よみ人しらず
後拾遺巻一　山おろしの人や思ふらんたえぬ　つゆのひのみのみなあまりに　源師光
新勅撰巻一　志のぶるかはりにのこりしものの花　つゆひかりのまさなるに　前大納言資賢
千載巻三　あはれをもいかでいひなむ春かぜの　つゆの人の心もかはらん　源光行
拾玉集七　さもこそやわが世はながきすさびの　つゆ時雨ぞあきのそら
壬生二家集上　さそはれぬ人のためとやのこりけむ　つきぞ照ると月の光かな
拾遺愚草上　さみだれのころにもなりぬ山の中さ　つきもみえぬ山の井の月
新後撰巻一　世の中は何かつねなる飛鳥川　つゆのあはれをうけたまふ　後伏見院
新後拾遺巻一　いつはりのなき世なりせばいかばかり　つゆ見えてもあまりの酒　前大納言為定

続千載恋一 [illegible] 円光院入道前関白太政大臣
拾玉集四 [illegible]
風雅恋下 [illegible] 前大僧正慈鎮
新勅雑四 [illegible] 安貴王
新続古今恋五 [illegible] 権中納言定頼
風雅雑中 [illegible] 読人不知
拾玉集七 [illegible]
風雅恋一 [illegible] 冷泉
同恋三 [illegible]
続撰恋上 [illegible] 藤原雅正
玉葉恋二 [illegible]
新勅雑三 みよしのの御舟の山にたつ雲の つねにあらんと我おもはなくに 人丸
風雅恋四 [illegible]
続拾遺恋四 [illegible] 康資王母
続撰雑四 [illegible] よみ人しらず
早蕨 [illegible]
風雅恋下 [illegible]
玉葉恋上 [illegible] 章義門院

新葉冬 [illegible] 太宰帥泰成親王
古今恋三 [illegible] つらゆき
続千載恋 [illegible] 深養父
続撰秋中 [illegible] 貫之
山家集下 [illegible]
新古雑上 [illegible]
続千載哀傷 [illegible]
新古哀傷 [illegible] 摂政太政大臣
玉葉恋四 [illegible]
新続拾遺雑下 [illegible] 上人
拾玉集五 [illegible]
古今恋二 [illegible]
風雅恋四 [illegible]
山家集下 [illegible]
同恋集 [illegible]
拾玉集二 [illegible]
壬生二百首上 [illegible]
玉葉恋一 [illegible] よみ人しらず

新拾恋二 あまのかる難波の浦のうきみるも つなでなくとも立ちかへるかな 同
新千誹諧 ひさかたの天のいはとのかりふね つなでこきつつかへるらん 源仲綱
風雅雑中 わか庵の松の梢なる有明の つなきてなかくも波のさよふ 前中納言為相
拾遺雑賀 ひさしくも世にふることをあはれとも つなかれしまつのおもひきや 平定文
千載哀傷 いつの年雲隠にし君なれは つきもかくれむ月の影 紫式部
須磨 ところより出くる日の影 つきもそれね移ろふさむ
風雅雑下 たそかれてもの川のまてとなる つまひつる秋乃かり舎 従二位為子
拾遺恋上 てつくりやさらすてつくりさらさらに つなきとめぬ川の空 文屋朝康
続撰秋中 白雲に風の吹しく秋の野の つなきとめぬ秋の白玉 前関白
新勅恋三 武蔵野やへのふるさくさ つなきとめぬかひの白玉 文屋康秀
古今秋上 秋の野に置く白露は玉なれや つなきかくる蜘の糸すち 民部卿経信
続後拾遺恋 君こそあはれつらき心のなき つらぬきとめぬ月の影 平宣時朝臣
続後拾秋上 あさかまる山をさしてそ つらぬきとめぬ玉そちりける 大輔
古今誹諧 あはれてふ言の葉ことにおく露の つるもそえのことそまつ 越中内侍
拾遺恋下 山あひの志ほの風にて つねさらぬ我身のうき 従一位家良
玉葉雑二 ありあけの月を ほとりて つれなくもみえしなつかしき 前大僧正慈鎮
拾遺哀上 君か世に逢ふとかめくれ乙女子か つゆあらは月のかけもさ
新古雑下 住のえの松も昔のみるめかな つゆなくもかのかひのえみ

新千雑中 新しき竹の葉におく霜も つゆかへて寒くも見えつらん 二条院讃岐
千載冬 さしはやき衣の袖やさえぬらん つくつくと何を思ひて沖の氷 権中納言経房
新後拾雑秋 さゆる夜は氷の上のさむけきや つらゝのこほり小夜更けて 陽成院親王
後拾冬 かつ見つつ霧の袖の神なかれ つらゝはる池の底の月 宜秋門院丹後
後千恋三 さそふやいかなる頃よ恋しとて つらくはかなきもかれ 法印宗快
玉葉恋三 恨てもなぐさめてまし中々に つらくそひとのあはれなる 西行法師
同 思ひつつぬればや人の見えつらん つらくてみえつる今朝のなこり 盛明親王
新後恋下 あふと見しちきりを夢のあはれにて つらくてもさらに憂きの風かな 待賢門院
新拾秋下 たれやまた朝霧の空にかすかなる つれにそみたる浦の舎 従二位親子
新千恋五 かれはてし秋のゝらの中の つらきちからぬ我身の事をし 前中納言為相
玉葉恋五 うらみてもつらきかなや思ふ身の つらきのみ袖そそまる 皇太后宮大夫俊成
後古恋五 いさめぬる人の心をかへて つらさはつ井にからきもの 素暹法師
新千恋五 年ふれは涙ちりそへ つらさをかりはなれても 従三位季雄
後古秋上 みし人のたのめて来ぬよひの つらされのさらぬ月 正三位知家
玉葉秋下 なかめつつうきあれき山乃もみち つらされからあかつき 前参議雅有
新拾恋三 たのめすはさてもねなましものを つらされのくもる月をもかへ 大納言経家
新後恋三 かきくらし渡る空の中なる人は つらされて月もみえは 藤原親方
後拾恋三 あひみてののちの心にくらふれは つらされはもとより 津守国基

後拾遺三夏 恨ひくらせと頼めもせすや つきさへあかぬ袖の露かな 権中納言師俊
拾玉集一 石もくもらぬよの明ぬ世中に つきさへふかくぬるよやこひん 皇太后宮大夫俊成
新古今三 うしとのみ後の世をこそ思ひけれ つきさへあかぬおもかけそまた 後徳大寺左大臣
新後拾遺三 うき世にはいつまてかとおもふ夜の つきさへ今夜そあかぬねさめ 前大納言雅孝
後拾遺四 あきのよのつきのありやと思ふかな つきさへ海のあまのひとり寝 今出河院近衛
新葉三 うらみても身をはしらぬ世中に つきさへけぬる心つくさて 兼貞云
新拾遺六 さかりすきし人のよをもつ つきさへはるかなる空の雲ゐに 藤原為家朝臣
後拾遺一 かくすれは人の世の中の何 つきさへなからぬ心なりけん 藤原為家朝臣
拾遺愚草上 あめの夜の浦なからひきすて つきさへらむつまてりさはこ 慈円法師
新拾遺六 今はとてうらむまてみゆるも つきさへ物思ひあさくせん 季房朝臣
玉葉四 うきときを思ふにも月の つきさへこふる涙なりけり 季雄朝臣
新葉十下 うつりゆくあはれをしらて花の つきさへあはれの色とや見ん 院御製
新後拾遺二 今よりもいかにあはれの つきさへともにわかれきに山嵐 前大納言為有
新後拾遺六 世の中そ物思ふかくもなかりその つきさへあかれし悲しかりけん 前大納言家康
同六 うきみても物思ふかな世中の つきさへぬれの心のちぎり 後人不知
後拾遺六 かくれゆく家のかたの古郷に つきさへ人の世をのこして 右大臣
新千載下 咲さからぬ花のいろ香をまさりて つきせすみるへき花の山かせ 前中納言雅孝
同三 よをしぬる人のふかき 世のつきさへかなしき 権大納言為明
新後拾遺三 あはれなる風のつきてしもあらぬ つきさへ余所に秋風の音 平時朝朝臣
千載三 秋かせのふくらぬはかりの つきさへもかゝやかなしきもの 藤原実方朝臣
同四 人もとはぬ庭のかけ つきさへもかなしきにも 土御門院御製
後拾遺六 世の中をとふらはむ人もなき つきさへにあはれそまさる 二条院讃岐
千載三下 あきのよのつきの心をしる つきさへもむねの月の 上西門院兵衛
新後拾遺二 かかるをそ人の世の中につきの つきさへかなしき心なり 藤原基任
玉葉四 ゆくも思はぬものの世の中に つきさへやすく心なき 入道前太政大臣
同 うれしきにかゝる世ともを つきさへみかくしおなし 左大臣
拾遺雑下 かつくるを春のとかなる つきさへ秋のこゝろ 皇太后宮大夫俊成
拾遺五下 いかに今の人の歌して つきさへもの思ひ 氏守
風雅四 同世に人をまつ思ひ つきさへふかき 民部卿
後古三 年月の世をまつ思ひそ つきさへ人の命 後徳大寺左大臣
新後拾遺六 まとろかとこゝろ うつさへ心の 道俱法師
後拾遺雑一 思ひわくるかたのまをさ つきさへ人の世の 太宰大弐重家
後古四 今宵やもしかゝり つきさへ人のあらぬ

新後恋一　しのふ山思ふ中にはしらすともすきにし　つきまふみてせく浪のかけ　よみ人しらす
拾遺恋又　しのふれとしのふれぬへき恋なれは　つきはれつきそやかて床　同
新千恋三　いとふへき方と思ふ身にかはれは　つきはれはそ思ふらん　後山本前太政大臣
続古恋六　今ことはりなる心のほとも思せと　つきはれはて思ひすまは　月花門院
同　うらみん人そ又そ思ひしるれ　つきはなかれぬもりしも露　安嘉門院大弐
新千秋上　吹からに嵐も月も待れけり　つきさてそ村雨の宿　伏見院御製
新続古雑中　いつまてか世をの捨し山里を　つきさとると松風そ　入道贈一品親王
続後拾秋上　月影は妻待山も山の色　つきさとると庵に鳴らん　権中納言公明
後撰恋三　宵の間にかたみ見て成ぬれは　つきさところにふかくしわかる　女
新葉秋上　秋風に浦より出る村雲の　つきさところや須磨の月　中務卿宗良親王
新千恋二　逢ことのかくて八重の契やかはらん　つきさところさてそ志のふれ　津守国重
続千恋三　浦のくりゆくさ浪のうきかた　つきさちさりにし世のなかは　中宮
新拾恋又　むすひつる契はありし手枕　つきさちさりかけしてき　前大納言為家
新千恋三　笋閑のことのはまでも捨すてん　つきさそとふかくてこそ　源清氏朝臣
続古恋又　情あらはいつはりとてもうらめし　つきさとなれは逢みん　権中納言資信
後拾恋又　うれしきもつらきも人のあはれにそ　つきさとこつ契や何かは　源政成朝臣
金葉恋上　うきなはあふよりかへるまて　つきさとゆかりとしらすは　右京大夫教
続拾恋又　行ゆくへとものとりうき事をとこうし　つきまはさて雑の涙ぞ　式乾門院御匣

新続古恋四　ゆふくれのまたぬ契のまくらには　つきされてかなしと思ふ　権中納言宗泰
風雅雑下　たのむもあらぬをことてひきて　つきさゝれぬ花鳥の色　永福門院内侍
続後拾恋三　なれぬとも名残とさきぬ思ひ　つきさられぬもせかれん　前大僧正公性
新続古恋三　いまそみやこやまてかくなり　つきさわれはあたる月の月　前大納言為秦
続千恋又　忍にもそあらぬものとて　つきさかるきにさてそれは　前関白左大臣
千載雑上　あひみんと思ふ心を又や見ん　つきさかさみもさらる　選子内親王
玉葉恋二　津の国の衣かりつる床に　つきさかさへ今やさそのつ　永福門院
新古恋又　今もそあらぬあはれとて　つきさかめ契とももあなし　よみ人しらす
新後拾恋又　今はまたあひそふ風の雨にまた　つきさかへみしこそ逢はゝ　前関白太政大臣
新後恋又　言ひとりのかへりくる　つきさかの花やむなしく　よみ人しらす
後拾恋又　待わひし浦の川ためしは世にも　つきさの逢ひいかにもと　正三位知家
風雅恋一　あつまちもとこの月のなかめて　つきさらかはるとも　平宗宣朝臣
新後拾恋四　つねにいへるさまそあるかな　つきさかとの契りあらは　太宰権帥俊光
続千恋二　命をはおしまれかし恋衣　つきさらりふかくそ忍ひ　前大納言為世
新千恋又　忍ふにも人のつらきて　つきさかみ涙にくれ　権中納言為藤
続拾恋三　ちきりをは後の世まてと　つきさかにかけつたのみ　平清時
新千秋上　銀河一夜の風にあはせこそ　つきさかとなりしみちみ　前大納言経継
続古雑中　山ふかくまたみなれぬ心の　つきさせぬ世のなかのひつ　土御門院小宰相

後拾巻四 [illegible] つきたにも[illegible] 禅心法師

新後巻六 [illegible] つきさへ[illegible] 中臣秋忠

後古巻三 [illegible] つきさたか[illegible] 道因法師

新後古巻三 [illegible] つきさたか[illegible] 後九条内大臣

新葉巻五 [illegible] つき[illegible] 右近大将長親

新古巻五 [illegible] つき[illegible] 深養父

後古巻四 [illegible] つきそ[illegible] 大納言通成

後撰巻二 [illegible] つき[illegible] 侍従行成

後拾巻五 [illegible] つきかけ[illegible] 後京極院大納言典侍

後撰巻四 [illegible] つき[illegible] 業平

新古巻二 [illegible] つき[illegible] 藤原義孝

新葉巻下 [illegible] つき[illegible] 権中納言実直

新葉巻三 [illegible] つき[illegible] 文貞公

新拾巻四 [illegible] つき[illegible] 頓蓮法師

新千巻二 [illegible] つき[illegible] よみ人しらす

新拾巻四 [illegible] つき[illegible] 太宰権帥宗

新千巻四 [illegible] つき[illegible] 太宰大弐[illegible]

風雅巻三 [illegible] つき[illegible] 院[illegible]

拾遺巻雑上 あけぬれど[illegible] つき[illegible] 従三位行能

新後巻六 山[illegible] つき[illegible] 法印定為

後千巻五 [illegible] つき[illegible] 照慶門院一条

新拾巻三 [illegible] つき[illegible] [illegible]法師

新後拾巻三 [illegible] つき[illegible] 中務卿親王

後古巻四 [illegible] つき[illegible]

手習 [illegible] つき[illegible]

拾遺雑巻 [illegible] つき[illegible] [illegible]

伊勢物語 [illegible] つき[illegible]

後撰巻一 [illegible] つき[illegible] 業平朝臣

新後拾巻四 [illegible] つき[illegible] 大納言為氏

新後古巻五 [illegible] つき[illegible] [illegible]院[illegible]

拾遺巻四 [illegible] つき[illegible] よみ人しらす

後古巻三 [illegible] つき[illegible] 従一位家隆

同巻四 [illegible] つき[illegible] 忠義公

同巻五 [illegible] つき[illegible] 清輔朝臣

新拾遺雑一 山[illegible] つき[illegible] 中務典侍

後千巻四 [illegible] つき[illegible] 中宮

新続古今集二　うつりゆく秋もつきぬかなへて　つきこそ人の袖をしほらん　藤原有家
大和物語　あはれともいはゞいふへき人もなき　つきこそ人のなかのみちなれ　よみ人しらす
伊勢物語　むかしをもおもひしらすやめくりきて　つきこそそれよとしくなみたは　在原業平朝臣
新勅撰集又　かくはかりひとりねかたのつれなきを　つきこそ人をなくさめてけれ　同
新後拾遺集一　つれなしとかつはうらみてなかめても　つきこそ人のおもひしらるれ　正三位家隆
新続古今集三　あはれをもしるへき人はさもあらて　つきこそまたき袖にやとれる　従三位成助
続拾遺集四　またきより秋のあはれはしられけり　つきこそ人にすむこゝろなれ　法印定円
新拾遺集二　わかくさのさかりをみるもあかなくに　つきこそやとるそてのうへかな　宜秋門院丹後
続古今集又　みやま木のかけさへとけき秋の夜の　つきこそゆるすこゝろなりけれ　宗尊親王
新勅撰集四　海人のすむ里のしるへの浦千鳥　つきこそまたみちをしるらん　殷富門院大輔
新後拾遺集又　ありあけの月の御船のさしいてゝ　つきこそあまのかはらなるらん　山階入道左大臣
新拾遺集二　夢よりもはかなきものはなつのよの　つきこそかはらぬかたみなりけれ　藤原範永朝臣
続後拾遺集三　あまのはらふりさけみれはかすかなる　つきこそなかめのうちにありけれ　信実朝臣
新拾遺集又　なかむれはかすみにくもるはるのよの　つきこそはなのにほひなりけれ　花園院御製
新千載集三　こゝろあるあまのかよひちふきとめよ　つきこそかよへおなしなみちを　八条入道内大臣
新拾遺集二　ねさめするたよりにもみよあきのよの　つきこそかはる人のこゝろに　康資王母
千載集又　こその秋のかきねにやとりし　つきひとりゐてそなかめつゝふる　忠岑
古今集又　このまよりもりくる月のかけみれは　つきひとりこそいまはなりけれ　よみ人しらす

後撰集雑二　かへりてもおもひそいつるよそなから　つきひとりこそすみわたりけれ　よみ人しらす
後拾遺集四　われひとりながめてこそはすくしつれ　つきひとりこそかはらさりけれ　和泉式部
続古今集四　そのかみのこゝろにかはることもなし　つきひとりこそまたもすみけれ　従二位家隆
続千載集又　なかめつゝまちこし月はかはらねと　つきへつゝのみわれもかはりて　権中納言為雄
拾遺集又　ひさかたの月のかつらもあきはなほ　つきひとりこそかはらさりけれ　よみ人しらす
続古今集又　おもひいてのなきかはりにはくもりなく　つきこそひとりすみのほるらん　法橋顕昭
後拾遺集四　いかにせむはてはいつともしらぬよに　つきこそまたもすみのほりけれ　平兼盛
新後撰集二　つれなくもおもひしらすやなかむらん　つきこそなれぬ袖のうへかな　入道二品親王性助
続千載秋上　夕されはこゝろにかゝる秋風を　つきこそなれぬ袖の月かけ　法印定円
千載集上　山桜雲もかすみにまかふとて　つきこそのちのかたみなりけれ　前参議教長
新続古今秋下　またしくれにしふりそむる秋の夜の　つきのゆくへもなくさめかたき　皇太后宮大夫俊成
続後撰集雑下　あきの夜のなかきおもひにねられねは　つきこそものをおもはせけれ　普光園入道関白左大臣
拾遺集又　かきくらしふりにしはなをなかめても　つきもこゝろのなくさめにける　よみ人しらす
千載集四　ひとりねのかなしさまさるなかき夜に　つきもこゝろのうちにすみけり　平実重
風雅集一　おもかけにみしはなにおもふこそ　つきもひとつのむかしなりけれ　後京極摂政
続古今集又　うつりゆくとしとともにやかはるらん　つきも人のかはるよになり　伊勢
続拾遺集又　うきものと思ひしらるゝあきのよの　つきとてなかめかへるそてかな　九条前内大臣
拾遺集又　ひとりねやおもひのこせるこの世にも　つきとかはらぬなかめなりけり　よみ人しらす

新拾春下　花の色もさそへばうつせ吹風と　つゆとのこゝろやむすぼほれ　後照念院関白太政大臣
続拾恋五　雨はれてつゆにこぼるゝ　つゆしげき袖もありけり　前関白太政大臣
後撰恋六　急ぎ来てよそに見るらん　つゆとぞみえしうきなかの　よみ人しらず
続古恋五　さびしき浦の浪の上に　つゆとなるべきなげきかな　従三位経朝
拾遺恋一　あはれとも言ふべき人は　つゆぞおきけるあはれとぞ思ふ　よみ人しらず
玉葉秋上　雲ゐなる空の月影　つゆものこらぬ袖のかりがね　院御製
壬生二品上　まちわびて　つゆをのみ露霜の　按察使公敏
新千恋一　いつはりをたのみし浦に袖ぬれて　つゆやたつらん浪のしづくと　権中納言教氏
拾遺恋一　ありしにもあらずなりゆく　つゆのみぞ出る　花山院御製
玉葉雑五　はかなくもあけくれて年月を　つゆにかはらで　同
新後拾雑秋　ほどもなく　つゆにとりておく　読人しらず
古今誹諧　みすぞら　つゆにこゝろを　大江匡衡朝臣
後拾遺秋上　秋風に　つゆにうつりて
拾玉集六　かねてより　つゆにうつらふ　二品法親王守覚
新後拾雑下　浅茅生の　つゆにかれなん　前参議有家
続古今哀　むかしをも　つゆにいまさらに　前大納言為家
新古哀傷　あはれなり　つゆのいのちの　小野小町

新後拾秋　清ければ　つゆのおきてぞ　如月法師
壬生二品上　身にしむ　つゆのことの葉　
玉葉雑六　月のみを　つゆのやどりの　清少納言
拾玉集六　住の江の松の秋風吹くからに　つゆまてらす　
後拾一　うちしほれ袖のみ　つゆにおきそふ衣　
拾玉集一　ささの葉に　つゆにおきそふ　
同六　かげとめて　つゆに紅葉の　
同四　ひとりぬる　つゆにやどりし山郭公　
新後拾春下　なにはかた　つゆにまじりて　順徳院御製
古今恋五　みなせ河　つゆにかはりて　よみ人しらず
長秋詠藻下　そこはかと　つゆにのみこそ　
新葉恋一　風のうへに　つゆによそへて　中務卿宗良親王
古今恋四　秋の野に　つゆによりて　藤原敏行朝臣
伊勢物語　秋の夜は　つゆにこそあれ　
新千春　ほとゝぎす　つゆによりて秋風ぞ吹く　前大納言為定
続古秋下　立田河　つゆにやまとに　中納言
新続古恋三　かきつばた　つゆによそへて　寂然法師
続千恋五　なげかれて　つゆにたちぬる　権大納言実衡

新葉恋三　よそにのみ見てしもあらん袖ぬれて　つゐにまたまた武隈の雲　右近大将長親
続後撰恋二　山かけにおつるなみたと袖ぬれて　つゐにまたまたあふせの松のまつか　前大納言伴平
続後拾恋　はるあまのあはぬ思ひをかさね　郭公　つゐにまたあはねと待つらん　太宰権帥為定
同恋四　忘られてさぞなかなし思ひつつ　つゐにはならぬなきの世にや　関白左政大臣
新千雑下　其のつらき今宵も暮れてそ　つゐにはうき世の夢と思ふ　花園院御製
新拾哀傷　見すてても思ふにつけ袖のぬれてぞ　つゐにのかれぬ方の露　源高秀
続千恋二　逢見ても又かゝる夜の契かと　つゐにえらけて物ぞ思ふや　平貞時
詞花恋下　おもひてもなにゝそめけむ此身まで　つゐにこゝろに忘るゝ時は　大江為基
新後拾恋三　かへすかへすうらみてもまた　つゐにそもの人を恋しと思ふも　玄覚法師
続後撰恋五　あふ事のなき名の川の浅からん　つゐにはやくもあはで恋しき　よみ人しらす
風雅雑下　忘られぬむかしを今にしのびても　つゐにゆくべき道とさきだつも　永福門院
新後拾雑下　かくてなほいつまでとのみなからへん　つゐにゆく身を知るともなしき　從一位忠順
同　老の後のつらさを恋ひてしのぶらん　つゐにゆくみちはおそくもなき　法印貫覚
拾玉集七　秋の風しのぶの山の夕月も　つゐに晴れぬ袖のうへにや　慈鎮和尚
千載恋下　うき身をもたのむ契の名残そ　つゐにはつらき別れかなしき　林賢法師
玉葉冬　雪ふかき山の木かげの松　つゐに見る人もなき夜の　順徳院御製
拾玉集六　色に出でぬ思ひのほどもしらせばや　つゐによも変らぬ松のしら雪　よみ人しらす
古今冬　雪ふりて年の暮れぬる時にこそ　つゐに見る人もなき松の　よみ人しらす

新続古今冬　ほかにふる木の葉ともにうつる　つゐにふりみちぬ松の松風　從二位為信
続古哀傷　いつの月のあはれをかけて　つゐにまさに人の世をしのふ　順徳院御製
続後撰雑下　雲となり空の月ともなりぬべき　つゐにはすゝむべき此世なれば　法印宗源
新古雑下　いつはりもかなしき風をきゝ　つゐにみにしみてぞ思はん　俊恵法師
拾玉集二　あはれなり月にさそはれし　つゐの命をまつぞと見れ　慈鎮和尚
風雅恋四　人ならぬ我身のさかりにも　つゐに思ひ忘れなんそれ　宣光門院新宰相
玉葉雑　帰りこむ程をかならず待たれ　つゐにぞ有るはなきの　形部卿範綱
拾玉集二　世中の雲をおもひあはせて　つゐにあるとみし人のしのびて　慈鎮和尚
同三　ひとりのみ世をうき物とおもひそめて　つゐの身を嘆きこそ　慈鎮和尚
同　今はとて人のこゝろのうつろふも　つゐにあはれなるかな　慈鎮和尚
拾遺恋草上　かつらきや我がゆく道の遠けれど　つゐに衣にかへすべき世を　慈鎮和尚
続千雑中　思ひとるやまの嵐のかさねても　つゐの身にとまるかくなり　前大僧正行尊
続後撰雑下　うきことをかきなしつゝ世の中の　つゐにえしらて過ぬべき　入道親王尊円
拾遺員外上　なにとてかつねならぬ世のなかにも　つゐの橋のうきよしらぬ　慈鎮和尚
拾玉集一　朝夕に聞くもかなしき人の　つゐの別をかなしみしらん　慈鎮和尚
拾遺雑下　思ひつつあひ見ぬ人をまちわびて　つゐにはかなくなりやあるらん　恵慶法師
新古恋上　みしまえや霜もまた消えぬ　つゐにみな我が身を風となる　左近中将通光
続後拾恋上　雪消えて今日は春の野となれば　つゐにむかしの人の跡をしる　前大僧正慈鎮

拾遺集又　みそれと年へぬるかなと打すきて　つのくむ芦も浅世の芦

同三　いけの國のこ乃池のつらのなかさに　つるのくむ芦もかのミ乃したすまて　よみ人しらす

後拾遺雑上　難波かたかせの吹風に浪たてハ　つるのくむ芦もみたれかりけり　後嵯峨院御製

後拾神祇　松もみな山老てさらに千とせあれ　つるつきそめし袖そさかりに　かねもり

拾遺神祇　ちはやふる松とそかけて祝ふ　つるつきし君かよろつ代　大中臣輔基

同賀　よろつ代とこそふるなるへし　つるつきしきミをいのるかな　安倍広安輔

後拾賀　めつらしき君かよハひに千とせす　つるかさねけるも行かぬらん　従二位能俊

後古賀　君か代はちよをへぬれと松ハなほ　つるかきれよゝにおほしの世の　読人しらす

拾遺神祇　ねとりの声や君か代に千代をへて　つるかさねてもまたまたぬ村人

長秋詠藻中　君か代は千代にをちかへるまきのこ乃　つるかねさしきミのかね

壬生二集上　うきをほうすへき年のいはひの庭して　つるのこもおほくさかりさきん　よみ人しらす

後古哀傷　つゆまてもなかくいた乃雲さえて　つるかなくなる波風かな　大江千里

新勅賀　はるの乃しらさきのなかれかな　つるのかくれなきあをみとり　前太政大臣御製

新拾賀　ちよまてもなかくいはふもきけ　つるのかきねのをのこも　元正天皇御製

新後雑上　玉のおもて春日の野辺にあさゐて　つるのあそふのこゑのゆきたる　太宰大貳為家

新後拾雑春　山水のあさき流のいはに　つるのなくとそ聞えつる　前関白太政大臣

山家集上　すみなれて人かくなくそなほ頭　つるの聲はなのなかゆくる

新千秋上　秋の月みてもあかなくふけぬるに　つまこふ鹿そなくなる山　皇太后宮大夫俊成

同秋下　秋風に霧のまよひ吹ぬる野の　つまとふ鹿の鳴声そする人　従二位家隆

玉葉冬　浦風のさむくふけゆく夜半の衣　つまとふちとりなくなりけり　中務卿宗尊親王

同　波路にもかよふ鹿の風さむし　つまとふ鹿の鳴音そきこゆ　前大納言経盛

後千秋上　さよふけて月のかけより山の端　つまとふ雁の鳴音そらに月影　後鳥羽院宮内卿

拾遺愚草上　思ひあへぬ秋なき山へ行かれて　つまとふ山の端鳴るに初雁　前大納言為氏

新拾秋下　つれなきに花ちる野の鹿の聲　つまとふ山の峯のかせそ

千載秋下　夕されは野辺の秋風身にしみて　つまとふ鹿の鳴声すなり　大納言公実

拾遺愚草中　狩人の入野の露のおく乃月に　つまとふ鹿をおとすなる人　中納言為教

新拾秋下　小倉山秋なくとひてさそふれ　つまとふ鹿の声はきこゆる月かけ

拾遺員外下　山さとの秋のねさめに床ちかし　つまとふ鹿のこゑそなくなる

同　秋風に萩の上葉のそよくなり　つまとふ鹿の鳴音さひしき　二条太宮大夫家肥後

千載秋下　見わたせは山もと遠く嵐吹く　つまとふ雲の鳴く　大納言通具

玉葉秋上　夜もすから秋の霞に見えて　つまとふ鹿のなく声の数々

新拾雑上　こゝろなき露もなかれて秋まさる　つまとふ鹿のこゑそなく　祝部成茂

拾遺愚草中　秋の夜のかなしき夜はの風に　つまとふ鹿もなかぬ夜そなき

壬生二集上　思ふやまかけにて夜もすから　つまとふ鹿のこゑそさひしき

後古秋下　ひとりねの秋の朝霧たなひきて　つまとふ鹿の鳴音はさひし　人丸

同雑中 湊風さむく吹らしなこの江に つまよびかはしちどりなくなり 中納言家持
風雅雑下 燈火の[illegible] つまなき[illegible] 祝部成仲
後撰恋六 [illegible] つまなき[illegible] よみ人しらず
新勅雑四 [illegible] つまなき[illegible] 太宰権帥[illegible]
新千秋上 天川かよふ人の[illegible] つまむかへ[illegible] 花園院御製
新勅秋上 天河うきつの[illegible] つまむかへ[illegible] 藤原[illegible]
新続古秋上 河上の[illegible] つまむかへ[illegible] 土御門院小宰相
拾遺物名 [illegible] つまこふる[illegible] 恵慶法師
続後拾秋上 山里は秋こそ[illegible] つま[illegible] 壬生忠岑
後拾遺秋上 [illegible] つま[illegible] 江侍従
新古秋上 [illegible] つま[illegible] 紀貫之
同 [illegible] つま[illegible] 従三位[illegible]
風雅秋上 [illegible] つま[illegible] 法橋[illegible]
後撰羈旅 [illegible] つま[illegible] よみ人しらず
続後拾秋上 [illegible] つま[illegible] 平宗宣朝臣
新後秋上 [illegible] つま[illegible] 前[illegible]
続千恋三 君こふと[illegible] つま[illegible] [illegible]
拾遺恋上 [illegible] つま吹風[illegible] 修理大夫[illegible]

壬生二京中 [illegible] つま[illegible] [illegible]
新千秋下 [illegible] つま[illegible] 後嵯峨院御製
千載秋下 [illegible] つま[illegible] 長覚法師
後撰哀傷 [illegible] つま[illegible] 閑院左大臣
続後撰秋上 [illegible] つま[illegible] 従二位家隆
玉葉恋上 吉野[illegible] つま[illegible] 常磐井入道前太政大臣
風雅恋一 [illegible] つま[illegible] 太宰三位
続古冬 小野山[illegible] つま[illegible] 皇太后宮大夫俊成
新後拾冬 [illegible] つま[illegible] 贈従三位為子
同 [illegible] つま[illegible] 源兼氏朝臣
新続古雑下 [illegible] つま[illegible] 丹波忠守朝臣
風雅冬 [illegible] つま[illegible] 基俊
新後雑中 [illegible] つま[illegible] 惟康親王家[illegible]
玉葉雑三 [illegible] つま[illegible] 前中納言定家
新古羈旅 [illegible] つま[illegible] 大納言経信
後撰雑一 [illegible] つま[illegible] 兼輔朝臣
風雅冬 [illegible] つま[illegible] [illegible]
壬生二京中 初瀬山[illegible] つま[illegible] [illegible]

古今春上　かすかのはけふはなやきそわかくさの　つまもこもれりわれもこもれり　よみ人しらす
伊勢物語　武蔵野はけふはなやきそわかくさの　つまもこもれりわれもこもれり
月清集下　むさしのゝ草のゆかりにきく萩よ　つまもこもりぬ秋の色也
新拾遺春下　唐衣すそのゝ庵のたひねにも　つまもこふるか萩の篠原　後京極摂政前太政大臣
新勅撰雑四　みかりするかたのゝみのに　つまもあらはに鳴きしの声　正三位家隆
続千春上　春たてはまつさく花を　つけよやまもりさくらさくやと　柿本人丸
続後拾雑中　思ひやれひとりしのふの人の心さへ　つけのをくしのさしてたのまむ　西園寺入道前太政大臣
新勅恋一　人しれぬこゝろひとつのおもひのみ　つけのをくしのさしてそおもふ　藤原義孝
萬葉上　君なくはなそ身よそはむくしけなる　つけのをくしもとらむとおもはす
伊勢物語　芦のやのなたのしほやきいとまなみ　つけのをくしもさゝすきにけり
新古雑中　あまのすむ里のしるへにあらなくに　つけぬをうらみてまつそはかなき　在原業平朝臣
壬生二集下　うつゝをもあらぬ世になをたのむへき　つけぬ秋まつかせのおとのみ
同　そのかみの流はたえぬ松の風　つけぬ秋の夕くれの空
長秋詠藻下　いく年よあはれをしらぬ秋の雲の　つけぬ秋まつはつかりの声
拾遺春　忍ふはてゝ後にあはれとおもふとも　つけそこゝろのあさき物かは　よみ人しらす
拾玉集一　法のためこゝろはへしもなをきの　つえとかけてもなかきよの月
拾遺愚草下　神なひのみむろの山の秋風に　つてやきかまし人をたのまむ
月清集下　衣うつ声はまちかにきこゆれと　つきつゝぬれし袖の白露

風雅秋上　なかなかに雲のいつこの夕ひゝき　月つゆかゝる山のはの松　院御製
拾遺愚草上　とふ人の枯野の秋は時しもあれ　月ひとりみる風のまよひに　順徳院御製
続古秋下　秋山のよそのもみちはちりはてゝ　月にうつろふまさきのかつら
続千雑下　老てこそ涙もしのふまとゐせめ　月はいつこの雲ゐなるらん　前大納言為世
風雅雑上　いとひつる世の外の山里　月はいつこのかけとなるらん　恵助法親王
続千秋下　いつしかとすみまさりける秋の夜の　月はこよひのまつよひのそら　民部卿資宣女
玉葉秋下　いつの人雲井の月のなかめより　月はかはらぬ空にすむらん　式子内親王
月清集下　なかゝらぬ夜のみしかさを暁の　月はとなりの峰のうへの山
続後撰恋五　たのめこし人のつれなき夜半の　月はうれしきあけほのゝそら　右近大将公相
玉葉恋二　なにゆへにわれのみつらき　月はつれなき夜半の秋風　前参議雅有
続拾雑秋　なかむれは心のほかの面影の　月はつれなき有明の空　二條院讃岐
風雅恋三　契りおきしその名もつらき夜半の　月そなかめしあはれならまし　従三位親子
拾玉集一　秋すきて冬のゆふへの時雨　月影つらくもふけぬるかな
詞花雑上　なくさむとあはれとなかめし夜半の　月そなかめしあはれならまし　中納言内大臣
金葉秋　さらにまた人にしらるゝ夜半の　月すみのほる秋の夜の空　三宮
長秋詠藻上　雲のうへにさやけくすめる秋の夜の　月すみのほるよはの池水
新千雑上　晴わたるみやまの峰の松の風　月ちるかけをむすふ池水　善源法師
続千秋下　時雨つる夜半のうき雲吹はれて　月はかくれもみえぬ空かな　丹波忠守朝臣

風雅雑中　ねるゝ夜の秋の[illegible]枕とて　月はなほ[illegible]有明のかげ　前大納言為家
新古秋上　人よりも心のかぎりながめつる　月はたれともわかじ物ゆへ　堀河右大臣
続千載　名のみかく忘れはてぬる古郷に　月はこゝろねて[illegible]　蓮生法師
壬生二示上　うらやむや[illegible]秋風の　月はよそにぬ人[illegible]
拾玉集三　[illegible]の[illegible]の　月はかりに生ひのそら
続千[illegible]　大井河[illegible]　月はこしそさしの[illegible]　入道前太政大臣
新千冬　[illegible]衣[illegible]　月はそのよに[illegible]あへも　後京極摂政
新古秋上　さらぬだに[illegible]の[illegible]　月はつれなき秋のよの空　左京大夫顕輔
玉葉雑　すむ人もなくて雲のよその[illegible]　月はあはれをつゝも[illegible]　小侍従
風雅雑下　[illegible]　月はなほ山の端にいつらん　西園寺前内大臣女
新葉[illegible]　これなり[illegible]心にしみもあはれなる　月はあはれ[illegible]　読人不知
玉葉秋下　たそがれの[illegible]　月はあはれてもみよかりけり　従三位親子
新後拾雑春　夕まぐれ[illegible]　月はなほよそもみるぬ[illegible]　後花山院内大臣
拾玉集二　君ならぬ人まつ[illegible]　月はなほ[illegible]　民部卿実教
続千秋下　[illegible]わが袖の　月はなほ身をも[illegible]　登蓮法師
千載雑上　[illegible]　月はもりまかり[illegible]
山家集　秋[illegible]　月はもりて[illegible]
続千[illegible]　わすれても[illegible]　月はもりの[illegible]　[illegible]

風雅雑中　[illegible]　月はもとの[illegible]　大僧正行尊
続千雑下　[illegible]　月はもしの秋もたえせず　法印[illegible]守
拾玉集四　[illegible]　月は昔の光さへその池　[illegible]為基
拾遺雑上　[illegible]　月はうき世の[illegible]
月清集下　[illegible]山[illegible]　月は[illegible]
新古今四　[illegible]　月は[illegible]　中務
拾玉集七　[illegible]　月は[illegible]
拾玉集四　[illegible]　月は[illegible]
月清集上　[illegible]　月は[illegible]
玉葉秋下　[illegible]　月は[illegible]
新勅撰五　[illegible]　月は[illegible]　永福門院
詞花冬　秋の[illegible]木の下[illegible]　月は[illegible]　藤原隆信朝臣
壬生二示中　[illegible]　月は[illegible]　よみ人しらず
山家集上　[illegible]秋の[illegible]　月は[illegible]
続拾秋上　[illegible]秋の[illegible]　月は[illegible]　右大臣
壬生二示中　[illegible]の梅[illegible]　月は[illegible]
拾遺愚草上　[illegible]秋[illegible]　月は[illegible]世[illegible]
玉葉秋下　世[illegible]秋[illegible]　月は[illegible]　皇太后宮大夫俊成

新千秋上　あくかれて物とおもふや秋の夜の　月はおほろを見えさそふらん　前大納言為世
続拾遺哀傷　いかなる人のうきにも君ゝゝも　つきせそめてみるそかなしき　小侍従命婦
新後秋下　なかめきてそ老となれるも盛なる　つきはあはれといはぬ物かは　藤原重継
拾玉集四　哀にも庭のおもみなる秋は露　月は見なれし小夜衣枕は
玉葉雑一　秋といへはいつも世の人の心なる　月はあはれにまたみえぬれは　西園寺入道前太政大臣
拾遺愚草上　わりなくも残る涙の袖の上に　月は秋も猶すみまさりけり
同　なにとなくうきにまかするあはれ　月はこよひの世の人の心なるを　円位法師
千載雑上　わけて月の庭のむなしきこそ　月はみやこと誰かいふらん　和泉式部
続千載三　わすれても思ひおもはれぬものの　月はみやとおもひしにほとけ　待賢門院堀河
新葉秋上　年をへて月の見まほしきものかは　月はさしてそ光をもとめぬる　後京極摂政前太政大臣
続拾冬　秋の名のみ枯野にしるしこそ　月はひかりをそへて照らすらん　法性寺入道前関白太政大臣
続千尺哀　月よりもまて澄ゆくにあはれ　月はひかりの光そへてけり　前中納言定家
壬生二家上　若みとりの浅緑なる色　月はひかりをよそにみえぬる
続古秋下　秋のよしこそあけぬる鹿のこゑに　月はひかりのよそにもゆかし
壬生二家中　昔くもるあまた秋の露の　月はひかりもさやけかりけり
山家集上　中くよろしく見ゆるて有明の　月は光そふるはなかりける　従二位保季
続古雑三　松まちわひて夜ゐにかへる　月はかのさやかに見えぬらん
新古秋上　松嶋や志ほくむあまの秋の袖　月はものおもふならひのみ　鴨長明

同　ふる人の袖のしつくの月やおもふらん　月はいつあかぬ秋のみやらん　藤原家隆朝臣
拾玉集四　秋といふよりもまさる夜の月も鏡　月は我なれ月と見るらん　中務卿具平親王
拾遺雑一　世をわすれ捨果てし月もあはれに　月はいくよみむとかしける
壬生二家中　世をふかく思ひいりぬる草の庵に　月はまさなきよそにてらすらん
同上　志賀の浦や遠ささなみに立かへる　月はいさよふ浦の浪まにそ　後京極摂政前太政大臣
新葉秋下　つきそ宿るひとりそ秋の雲　月はさらに曇らぬ山の端に
拾玉集三　あかねさすひかりのにほひ秋のよを　月は夜あらぬみそらなる山　
山家集上　ありしにもあらぬ宿にも秋の月　月はおなしくかはらぬ影なれ
新後拾秋下　いつよりも今宵そ秋の月の夜は　月はかれて曇ゆくなり　平貞秀
風雅夜　水鶏なく森の下露にぬれて　月はかくるるそらのあなたの宿　前大納言実教
拾遺愚草下　山の庵は山のはにかかるそ　月はまたれし秋のみなかけは
新古秋上　あくかれて秋のいらぬ庭のまそ　月は入る夜なくらむ　宜秋門院丹後
新拾夜　ゆく方も見えぬ秋のよの空　月はかすみもすみわたるかな　前大納言実名
壬生二家中　いつかりも露の秋の夜の　月はこよひもかしこの雲　従二位家隆
玉葉雑夜　雲晴て露のまきれぬ月影の　月はさやかにてりまさるらん　源光行
風雅秋下　秋はすみのぼる雲の上の　月はへたつるかたもなし　前大納言為家
続拾雑秋　月をそて見るも涙の露の　月はひとりなかむるかなし　藤原家経朝臣
玉葉雑一　常よりもみるほとなみの夜の　月はひとりもとめてなかめかな

新後秋下　あふきても心乃中そあはれなれ月のひかりの夜をつくしけん　平宣時朝臣
拾遺愚草下　かたふくも情ちそ見る都かな月はおなしくすみわたれとも
風雅雑上　さらに猶かけ入ぬ山もなかりけり月はさやけきあまの橋立　前大僧正慈鎮
新後拾羈旅　旅人の見るやゆふへの秋もすら月はおなしき都の山ちか　藤原政宗
山家集上　かゝりける心はいかに秋のよの月はなかめの袖にやとして
月清集上　ありあけの浪にもひかりかくれけり月はそらにもまつ浦のうへ
新後拾秋上　あきらけき空にかゝれる初秋の月よりつくる初雁の声　[illegible]
拾玉集六　ゆふくれの色あかくて秋のこゑ月はちかひて立ちのほるらん
新後拾秋下　秋田もるかりほの露やふかゝらん月はぬれてもおほろなる延　順徳院御製
玉葉秋下　空すてはこちらものかこてみるの月はそらの雲も秋の声　平貞時朝臣
拾遺愚外上　やとそらき秋と旅とありあけも月はなくさめも心おもはは
壬生二集下　ありはやる宿もなき秋の月の別のなきもの人ぞ見るよ
拾遺愚草上　都ありし旅のつまとなりてみる月はつねに秋のしかをそ
同　うち出てよるの旅そとなる月はくもらぬ野川乃里
新葉秋下　山高き月の露をかさねつゝ月はかゝらぬ雲ゐの浮雲　皇后大夫
後拾秋上　よそまては見えぬものをくらへ月はかゝらぬ空のの白雲　中務卿宗尊親王
新後秋下　こえくるよしの宿のかさねつゝ月はかゝりし秋風の声　前大納言実教
壬生二集中　おもひおく雲の秋も空晴て月はよそに見る雲の空

新後拾秋下　身にしらぬあはれを月に見る月はちからのそらにうつる哉　参議雅経
新古今雑　かけて見る袖のなみたやそのまゝに月はながめの宇治の橋姫　法印幸清
新後拾羈旅　なかなかに旅にかくれし西ひけの月はみそらをゆく人の宿　源仲綱朝臣
新古雑上　旅ねするあはれもみる宿もわすれや月はくもらぬ秋のなかに　大江千里
新勅秋上　天津空あまのかはらのなみそや月はあきのうらに清き中にし　寂超法師
拾遺愚外上　大空の月しらぬきよき月の影そそ月はそのかみにもの思はす　後鳥羽院
新葉恋四　雨はれて雲井のかけはまさるらん月はそのかはりはなき世を　後醍醐天皇御製
新千載哀傷　めくりあふてせのまの秋のさかしまて月はそちらさる見えし上人　前大納言為家
新古羈旅　なをての月ありけることは月はそちらさらさらぬ中山　藤原雅経
新後拾秋下　なかそらの雲の旅路をへて月はそのかけのくもる秋の人　藤原家隆朝臣
後拾秋下　伊勢海やしほちにうかふ月はそのかゝる秋乃浦波　按察使資平
壬生二集上　卯花川みなとのしもの月はそらにこそ月はまさきの松　衣笠内大臣
新後拾雑上　更けゆけはよそのさやけき月はそなはりさえのこゑ　行誉法師
拾玉集六　秋の野のなかにやすらふ月はそのかしこのくもの　前大僧正
新後拾雑上　風わたるつゆの枝の秋も夜ふけて月はそのうへにかゝる夜の秋　勝定院贈太政大臣
月清集下　晴わたるよその雲もかゝりけり月はそのうつる野の秋
拾遺愚草上　なかめやる夜の秋そさもあらはも月はそかにわすれしゝつ
新後秋下　秋の夜はひとり山風吹けとも月はそのさやかなる波　院大納言典侍

新続古今羇旅　草まくらぬれつゝ露のやとりにも　月のそてにもやとる夜半哉　前大納言実教
新後拾遺羇旅　おもかけを見し程さそへ旅ねにも　月のそてにもやとる月の影　左大臣
新勅撰雑四　いまは海士のかりほの床のさむしろに　月のそてをもかたしく哉　式部卿成重
新千載秋下　ながめつゝ月そともしる夜をすさひ　月やそれともしらぬ露けき　前大納言為氏
山家集上　河風のすゝしきかたに宿しめて　月のそこにそ秋は見えける　前大納言為家
新後撰秋下　さらに麻のさゝやかなる月のかけ　月やそこなる秋の里人　太上天皇
新拾遺賀　あきらけき御代のはしめの月なれは　月やみつ万代乃秋　信実朝臣
新葉雑中　もひのまに雲のはれ行く夜半の月　月やそこなる秋の山　前大納言実房
新後撰秋下　あまのはら月もあかしのうら波に　月やそこなる秋のかけ　後法性寺入道前関白太政大臣
玉葉秋下　山のはに風さえわたるみ空かな　月やそこなる川の波　法印定恵
月清集下　我秋の今やなかはの月かけに　月よ雅ぬ影は色にも一つ　従二位家隆
後千秋下　玉井河氷も秋の岩もる月　月よあかつき氷の影もよる　平維貞
新千雑上　いつもすむ月もいかなるあき乃夜に　月よあかつもつき影池
新後拾秋下　さしかはる雲まも秋の影すみて　月よあかれぬ老の洞を　前右兵衛督公藤
玉葉賀　雲井もてなつかしきうつる月かけ　月よあかれさらに秋の比　前大納言為家
拾遺愚草上　ことし夜の秋の月は　月よあかれぬ秋の宮人　正三位秀経
新後拾秋下　志賀の浦の波も光そ秋の月　月よあかれさるなかむ月の　前大納言為氏
山家集　めくりあはて雲のよそには成ぬとも　月になれゆくむつひ忘るな
新葉秋下　おなしくは心にかゝる山の端を　月のあはれゆく秋のよかな　新宣陽門院
後撰哀　あはれともみる人もなき宿の月　月りまさるそらにそさえける　前大納言為房
新勅撰秋下　今こんといひしはかりの秋の夜の　月はあかしてなかめつる哉　前大納言隆房
拾遺愚草　峯の嵐にしつかなる月　月のあかつきさむしろに　土御門院宰相
続後撰秋中　秋の夜は月にあかして明はてゝ　月のあかつきのなかめせん　源光氏朝臣
新千秋上　いくよせの月にうかれて秋は来て　月よあかぬなみ乃松乃声　藤原信実朝臣
後古雑上　今すれはたのむも月の秋の空　月よなかめもの秋乃一声　前中納言為定
新葉秋下　さえわたる夜半の露のいく秋　月よなかめの月のさやかに
拾玉集七　七夕の秋のなかはの空の色　月よあかつきにつけてあかつき　正三位知家
続後撰秋中　夜のふかき秋の月にさそはれて　月よもなかめの影やあらん
山家集下　くもりなき月のかけにそなかめつゝ　月よもなかめの秋の宿　平重村
玉葉雑一　ゆくゑなき心のやみをはらふらん　月よもなかめのよしを宿さん　藤原家隆
千載秋下　宮こにて月をあはれと思ひしは　月よりうつる萩の花影　従二位行忠
新拾秋下　秋もすゝ秋の心をなくさめて　月りうつろふ麻のさ衣　参議雅経
新続古冬　浪の上にうつる影さへすみかへて　月よりうつるなかの秋　中宮
新葉恋上　いとゝまた月の光をかこちつゝ　月よりうつるやまのはの月
続後拾秋下　あはれみる月の光そ秋の夜を　月よりうつるみそ衣のうらん　前大納言為家

続後撰秋上　秋されはいとゝ思ひをますかゝみ　月にうらみて鹿も鳴なり　源資平朝臣

玉葉秋下　みなとの海や秋の夜すから海士の釣　月のうつるや浦つたふらん　皇太后宮大夫俊成女

新古雑中　姨すてをさそへあさちか末とほく　月はのこれる人のおもかけ　摂政太政大臣

新後拾秋上　妻恋ふる鹿のねさそふ浦風に　月はのこれる数そまさりて　従二位為子

同　むかし思ふ山のおくまてたつね来て　月にのこれる峯の松風　伏見院御製

続千雑下　いつかたにの名残やおもひ捨し　月の松風をしらぬ夜半かな　円光院入道前関白太政大臣

新古恋四　今はとてたのめし夜半のかけもなし　月はかはらす人の面影　八条院高倉

拾遺愚草上　夕へなかめし秋もへたてぬ宿にてそ　月はおもふにかはる夜な夜な

壬生二百上　もろこしの岩こす波のおとはして　月のよるなく千鳥鳴なり

同中　こゝろなき身にもあはれはしられけり　月ふく風に秋のはつ霜

新後名　姨すてそまて見る秋の空はれて　月は程なき峯のむら雲

月清集上　おもひやれきのふの秋の夕くれに　月はさやかにちかき山のは

長秋詠藻　うき身なれはをかれぬるかなうつり香も　月のやとるは袖のなみたを

長秋詠藻中　わすれぬはたのむる秋にひとりすむ　月は山のは人の心に

拾遺愚草上　くもりなきてらすよりもさもあらはれて　月やこよひの影そさやけき

新続古賀　我君の光をさしそへて　月はまことに千代のかけ　是心院入道前太政大臣

新後拾賀　おのつから秋のなかはの夜もすから　月は池水影そへてすむ　揚光院大納言

山家集下　初尾花くれなゐふかき露にそ　月はさやけき夜をてらすらむ　祝部成良

続拾秋上　さむしろの嵐は夜さむになりにけり　月はまたさやかなる秋の夕風　前大納言為氏

同秋下　須磨の浦や関の戸さして夜もすから　月はさやかに秋の浦風　前大納言為家

玉葉雑一　わかれにし人の面影まちかくて　月はことに涙そふなる　中務卿宗尊親王

新後秋下　住吉の松の下葉の色そへて　月はさえたる秋風の声　西行法師

拾玉集六　秋の夜はおもひかけぬ月影に　月はさらにすみのほるらん　従二位家隆

千載秋上　わか宿の秋の夜すからおもひ知る　月にかはらぬ人もなし　藤原季経

玉葉雑　思ふ事ありてそ見しをいかにせむ　月はこれにはあはれなりけり　夢窓国師

続古雑下　いつはりのなき世の人はすくなきに　月はなほうらやまし雲の上

山家集上　うれしさは君にあふ夜の秋なれは　月はさやかにてらしはてゝ

新後拾雑下　世をすてゝ後はいかなる山里に　月にこゝろやすむらん

風雅雑上　住なれし里をいつかとおもひしに　月はさやかにさとの秋

壬生二百下　角田川ことゝはむとは思はねと　月はあかなくにふる風もなし　前大僧正慈鎮

新続古羇旅　ちらさすはかり寝の床の山路にて　月はあかつきの秋の旅人　参議雅経

新古恋下　山たかみ峯のあらしにさそはれて　月ははれゆく空そさひしき　二条院讃岐

新後拾秋下　旅人の心やとむる宿ならは　月はさやけき道をしるらん　従二位家隆

新拾雑上　明ぬともたれにかたらむ秋の夜の　月はさやかに浦の浪風　藤原隆信朝臣

後撰恋六　今はとてわかれしまゝのかたみにて　月はさへてそあさきもの哉　業平

続古雑中 山人の衣なるらし白妙の 月にさらせる布引の滝 後京極摂政前太政大臣

続拾秋下 橋姫のかたしく袖や夜やさむき 月にさえたる宇治の河波 太宰権帥為経

拾遺愚草上 身にしみて関にふきこす秋風の 月はさえたる松風の声

新続古冬 天津風雲ふきはらふ嶺の 月はさえても鐘の音かな 権大僧都[illegible]

壬生二集上 浜松の枝の風も年ふりて 月に浜ひろき霜の一声

玉葉冬 外の霜の夜のひかりさえて 月はうけたる玉川の里 前太政大臣[illegible]

新古冬 雪ふかき嶺のまさかきあさかれて 月はみかけて行くや[illegible] 皇太后宮大夫俊成

新千冬 花とみし雪のまさかき[illegible]雪 月はみかきし嶺の白雪 按察使[illegible]敏

新後秋下 あとたえて川末と[illegible]山 月はうつへきかけもなし京 権大納言[illegible]信

新後拾冬 待つ山の嶺にふりしく雪 月はみえきえ雪の庭 従二位家隆

新葉雑上 いかにして月をも雲の上の 月のみ世のまとかなるや 権大納言[illegible]時経

月清集下 秋そらの本ふかき露の 月は庭あらす夜の山 源[illegible]春卿

新後拾秋下 浪の音に露をかさね 月は白き海風 権律師[illegible]

続拾雑上 わか浦の浪の下葉に 月は白く浪の[illegible] 従二位親子

玉葉雑二 夜のはまつ露はらふ 月はたえて露ふかき 後西園寺入道前太政大臣

長秋詠藻下 冬池に影[illegible]浪 月はしけくともみる

新拾冬 つもれるたつたの[illegible] 月はあかきまてさえ

新拾羇旅 旅人のよはいりふせの山ふて 月はてらしてふき人 中納言[illegible]

玉葉春下 くれぬとも宿とはいはし山桜 月にもちれる花の梢は 冷泉前太政大臣

拾遺愚草上 秋の夜のあまのかはかせ[illegible] 月にむかひて雲もなき

壬生二集上 秋は猶心つくしの夕くれに 月よりうつる[illegible]

同中 玉川の浪天津風[illegible] 月にもとむる[illegible]

新千秋上 曇りなきたかしとみえて秋の露 月にもわたる[illegible] 後醍醐院御製

新続古羇旅 くれもてふ浦の彩あれは 月にもかけてゆく[illegible] 前大僧正[illegible]雅

新後雑下 身にしみる[illegible]の[illegible] 月にもそらも[illegible] 中臣祐親

続千秋下 あきすみてかかる[illegible] 月にもつきせぬ[illegible] 藤原[illegible]

新葉秋上 みつしほにうつるかけ 月にもつきせぬ[illegible] 前大納言季経

同冬 浪のまに凍る浪も 月にもさえぬ[illegible] 前中納言[illegible]

続古春下 今こそ春の[illegible]ふる[illegible]や 月にもあかき霞の空の雲 二条院讃岐

新続古冬 かさなるは山風[illegible]大井河の 月にもてらす[illegible] 後嵯峨院御製

続古羇旅 たくれぬ関のとさしぬ[illegible] 月にもまてしはしの山 従二位家隆

拾遺員外上 あくれぬ花にちる[illegible]人 月にもあかぬ[illegible]

続後撰雑 里のあまの浪[illegible]さや 月にもも秋のゆふへ 蓮生法師

金葉秋 あかしかたの葉守の秋も 月はみな[illegible] 源俊頼朝臣

続拾秋下 ちりかかる紅葉[illegible]西河 月にもそのの秋みえ[illegible] 侍従[illegible]

新拾恋三 西新と[illegible]の下やる別れ 月にも人の[illegible] 前中納言基[illegible]

月清集下　松かせにかよふ秋をきゝそめて　月の浦人ことを和すなり

拾玉集四　夜の庵は待もたえしものゝさひしさ　月に淋しき山の井の水　中納言兼輔

続千五三　浮雲にわたりもはてぬあはれさに　月のてるともみえさりけり

壬生二下上　老ぬれは夜半の寝覚やこひしからん　月と花とをあかすなかめん　西園寺入道前太政大臣

玉葉雑五　なかめつゝよをへにしけり世の中に　月と花とにあそふこゝろに

壬生二下上　春秋は空にもあらしなかめそて　月と花とにあかぬ身なれは

玉葉雑五　うきことのみしけき世を秋のよの　月と花とを忘れやはする　法印

同春上　あかて見し花のあはれもかはらぬや　月と花とをなかめのみして　従二位家隆

同賀　今はたゝ君か千歳の秋ことに　月と花とを君そみるへき　後京極摂政太政大臣

壬生二下中　あかて猶ともにみるへき身なりせは　月と花とは友とみてまし

新古春上　かつちらん花のさかりの夜なかめは　月と花との名残なるらん　摂政太政大臣

壬生二下中　あかてなを花の衣にしほるゝも　月と花との名残ならまし

拾玉集七　ひとり人をまつよのはれぬ名残にも　月とともにや秋をすまさん

玉葉夜　ながむれは晴ぬる雲の夜はのかね　月とともにや山をこえなん　左兵衛督雅孝

新後古秋下　くもれる秋の夕くれも山の端に　月とともにやなかめのこさん　寂蓮法師

新古秋上　秋の田にかりほのいほのとまをあらみ　月とともにやもりあかすらん　左京大夫顕輔

玉葉雑五　久堅の月のみ人にしられつゝ　月とともにあけし山のは　女御徽子女王

風雅秋下　風にみたるゝ萩のうへのつゆも　月とてらすなかめの庭　院御製

月清集下　庭の面に雑の人の声もして　月と風とにしつかなる夜

拾玉集七　さらにうつるもやかの郭公　月と旅ねのまくらなりけり

壬生二下上　时雨つゝ暮れゆく秋のはては又　月と雲とにまよふ頃かな

拾遺五草上　あはれなるいほりにもれて秋風の　月と霧とのはれまかな　前大納言為家

新千秋上　なかめやる心のうちもはれやらて　月とつれてや秋をしるらん　藤原家隆朝臣

拾遺五外上　みちのくの雲ゐにかゝるあはれさは　月と秋とのさかりなりけり　八条院高倉

拾遺五外上　待ほともはるかにひかす秋風に　月ときほひてかすむ夜半かな

金葉冬　かきくらし雪ふる夜はも山のはに　月とゆきとのあはれなりけり

新葉冬　花と雪と見まかふほとに冬の夜は　月とゆきとをみるや此山　八条前太政大臣

月清集上　里人の軒はにかゝる山かけに　月と雪とのさやかなるらん　後村上院御製

新葉冬　雅かみしもの夜さむに衣うつなり　月とゆきとのあかす夜半かな　清原元輔

玉葉雑一　見るひとの心やいかゝしのはるゝ　月と水との秋のなかめは　藤原道信朝臣

新古羇旅　ほのかにも尋ね来にける秋の夜の　月ともろともにすめる都に　藤原家隆朝臣

拾遺五冬下　霜清くこほれる夜半の庭の上に　月とも見えて雪そふりける

風雅雑上　春風のかよふ山路の花の香も　つきぬ名残の月とのみ見む　静仁法親王

新後古夜　秋の夜はふけゆくまゝにあはれなり　つきぬなかめの月の夜の空　従三位成光

新千五三　たちかへるよのならひには秋もなし　つきぬなかめの月とこそみめ

同　あはれしれ君かなかめの秋の夜は　月とのみまてなかめつる哉　基俊

月清集上　とはみつる雲のあなたの嵐にも　月さへいそくはりまかたかな

掛　九重にふきそふやまの風の音の　月かたふけはおもひはなれ　仁和寺二品法親王守覚

新勅雑一　もろこしの浪のそこにやしつむらん　月はなほそれかと思ひぬる　式子内親王

新後拾雑秋　玉のをのたえまの月にさそはれて　月とはあらはれ物思ひもなし

拾玉集二　花紅葉そのをりをりの　月とはおもふらんありやなしや

山家集下　みなとにてあまの浦わに浪こえて　月をみるやさしき心かな

新勅恋五　たのめつゝこぬ夜あまたになりぬれは　月ともひとのまつとしらなん　赤染衛門

続千雑下　なかめつゝ秋もむかしにかはらねと　月をふるさとゝ我やなりなん　後一条院御製

続古恋　雲ゐまて秋のはしめの夜半の月　月をみしよりはかりそうしと　前大僧正実乗

壬生二百中　橋の上をあまのかはらにわたるらん　月はへたてぬ野への露かな

新後秋下　なかめわひ心をさむるよるの　月にとはるゝ心おもふらん　よみ人しらす

新後古雑　君かためいかにしてかは月かけを　月はきよくもてあそふ此の秋　西行法師

続拾恋三　今はとてゆふへの雲に消えぬれと　月をわすれぬ袖の涙か　円浄法師

風雅秋中　我心まつらむよるのうちにきて　月よりもさきに秋そすみける　津守国平

拾玉集六　宿にあれて身にそのゝりけり　月はまつかけを見ましてそさひしき　院少将

続千恋四　限ともなくそかはれる夜の　月とかさみてはるかなる人に　藤原為経朝臣

新後恋四　かりのよのかりねの月をおもひて　月をみかとてはるけき　今出川院近衛

風雅秋中　小山田の露のおくてのいなむしろ　月をかたしく床のひとりね　前内大臣

新古秋上　さむしろや待夜の秋の風ふけて　月をかたしく宇治の橋姫　藤原定家朝臣

続千秋下　世の中のうきにつけてもなかむれは　月とそらにて成ぬへき哉　殷富門院大輔

新拾秋下　こよひ今そかくてやきく千鳥鳴　月をかけたる秋の船人　よみ人しらす

月清集下　あま人の釣する袖も秋の夜は　月をうつしてかへるつり舟

新勅賀　我宿の花をみつゝも雲の上の　月とそのかみ思ひいてつゝ　前関白

新後秋下　清見かたせきもとゝめぬ浦風に　月とやいはん波の関守　前大納言資季

新後拾秋上　待人のこぬよの床のさむしろに　月をそやとすうちの橋姫　前大納言実教

玉葉雑三　ひとりすむあれたる宿の床の上に　月をそやとす大方の里　寂然法師

新勅恋五　いひしらぬ衣のうらのなみたには　月をこそかこつ袖の露　大蔵卿有家

拾遺雑上　いつはりにわれはいくよの山のはのそて　月をみてあふ夜のなかの空

続後拾秋下　露わけてたつ袖にもさそはれて　月とそ今宵かたふけり　中務

玉葉恋二　まちあかすわかれはいつも山のはの　月かたふけは今よりそ思ふや　前大僧正慈鎮

拾玉集四　うつろふ今はふかくしのふ頃　月をねとふ秋かせの松風

同三　ひろさはの池の水際に思ひて　月をたのむ人をまちぬる

新勅恋五　きみまつとあれはてにける宿にして　月をまちわひぬるよもすから　よみ人しらす

新後古雑上　何事に露をもさそふ此ゆふへ　月とあはれぬ世なりせは　小侍従

玉葉秋下　うきなからいとはれもせぬ夜もすから　月をみて心にしみし秋のあはれ　西行法師

拾遺愚草下　よるなかき雲のはてには峰出れは　月はなかりと見えてそあけゝる　後京極摂政前太政大臣
新勅秋上　白雲のゆくかたの山をなかむれは　月ともしらぬかけの峰より
壬生二百中　時雨れつる雲ゆく風に雲晴て　月かひとりのこる嶺の山
月清集下　秋もすゝしさなかの雲に向ふ　月はむかしのかけやふる雪
玉葉旅　吹やぬる葉まよひの露のうへに　月をのこして残るひと　太宰大弐重家
月清集下　あくる夜の影もけなし花の風ふけて　月は待すてゝゆく白雲　衣笠前内大臣
続古雑上　あかつきとかきつる山の峰の　月をのこしてゆくの鳥金　前大納言為通
千載秋上　たくひなく清しとそ思ふ秋の夜の　月をのこしてゆく峰のね　参議雅経
新勅秋下　あかつき秋の夜のかへてかなしき　月をのこしてやまてをかへ　後鳥羽院御製
新続古恋三　いつはせんこぬ夜あまたの袖の露に　月をのこしてまつ夜の空　二條院讃岐
新勅恋五　こぬ夜つもりそれやたのめし夜半の　月をなこりとみえてそくれ　永福門院
続千雑上　天乙女袖ふる夜半の風さむし　月をくもゐにやかて見る
月清集上　山のはにあかなくに影を清見か　月をゆく末のさのかけの風
風雅秋上　ひとりふ若葉のうへに露おきて　月をまつ霧のもかはれ　藤原重顕
玉葉恋　都にもいまやとおもふ山の端に　月をまちいてゝおもかけそ　常磐井入道前太政大臣
拾遺愚草中　むさし野の露わけゆけは霧のうへに　月をまちとるまの夜のそら
同下　ありてうき命なかくは八月の　月をこひしとやみのゆくかは
拾遺雑賀　あはぬまにしてうき人をうらみてく　月をあはれといはぬ夜そなき　紀貫之

後撰恋二　独ねの床のうはの波を見て　月をあはれとつきにしつる　よみ人しらす
続古雑下　秋もまた山のはちかき有明の　月をいつまてかなしからん　正三位知家
玉葉恋二　おもひやる人のなかにおもふ　月をあはれとおもひ知らせん　按察門院
続後撰雑中　いつもかくこそありけれ秋の露そ　月をあはれとおもひそめけん　寂蓮法師
同　ちかはるゝも夜はなかきあきの夜にそ　月をあはれと見てやいらん　藻璧門院少将
拾玉集四　海のはてゆくまでの秋の夜の　月かすみわたれる浦に詠て
月清集上　春暮の空によそにおもふ　月をも秋のそらにみえし
山家集上　たちそふ人の心にかはらまし　月をさやかにみゆるかな
千載秋下　さ夜ふけてさぬる衣そさむしろに　月をかへしてや衣うつらん　仁和寺入道法親王守覚
新後秋下　なれてよむかしは知る夜の　月をこゝのまの秋のよの風に　大蔵卿為家
続千羇旅　旅ねする夜の空にゆく雲の　月をみやこの昔をおもふ　源兼氏朝臣
新千雑上　今はまたゆくへもしらぬ心に　月をも見えはあはれなり　等持院贈左大臣
続千羇旅　清見かた浪の関守けふもまた　月を見すてゝ行くるさ　祝部成茂
玉葉旅　清見かた雲ものこれぬ袖のうへに　月をあはれとしのふなり　前中納言定家
千載雑上　行末の岩ねにふれて出る　月をあはれと山の端そ見る　平実重
続千秋下　いつはせむ月をまつ夜の秋の雲に　月をこれはかりとはいかにせむ　為道朝臣
千載冬　浮世にはあはれをかけて清し　月をあはれとみしやつらしと　顕昭法師
拾玉集六　たえてなかりて秋の山のはの　月はもとの空のうさの心ならん

続千五百番　むすふ手に扇もさらに忘られて　月をも月とまたぬころかな　後嵯峨院御製

新後拾遺夏　花ならぬ影もまさしき草の葉の　月をもまさて涼しかりけり　建礼門院右京大夫

山家集上　中々にまとはさてくもる月の　月をまてあかす涼しき影の

新古今三　流れ出る水の上までやすむらん　月をもめてつる夜の空　有家朝臣

同雑上　雑波かたゝあはれもこゝの秋ならで　月かけ清き影ぞさやけき　俊恵法師

拾遺愚草上　打ちはへてまつほとふかき夜のまゝ　月のあはれに秋もなかりき

月清集上　あさ風や門田の稲葉吹く風に　月影清きあはれにこゝも

新続古今　我ゆくもしらぬ山路や山の端の　月かけ清く見えてあけけるを　大宰帥敦光

拾玉集一　夜さむにて物おもふ宿のさむしろに　月影清きさえてさやけき

同　あまのすて物思ふ宿の清らかに　月かけ清きあまの空

月清集上　あとたえて分る海辺の浦の秋　月かけすむ塩の浦

同　浦風のよさの松むらをかけて　月はすみおきの白波

壬生二百中　霧はれし山吹の木かけに　月影ぬる波のくまの

拾遺愚草上　白雲は残らず霧も末はれて　月影あらはに秋の夜すがら

拾玉集　うちしぐれ絶えぬる山のおもかけに　月影ふる雲の跡

新拾雑上　もしほ焼く浦のよるにきさらの浜　月かけも雲もみだれ　藤原為家

拾玉集四　浦風の吹く上に吹く風　月影くもる海の浦の

拾遺愚草上　神かきや霧のまに〳〵見ゆる月　月影やゝ山のはの秋　従二位家隆

玉葉秋下　基方くもりなく晴れて　月かけのはち白妙に

拾玉集四　さほ姫のさよの月もかけ清く　月影たかき夜のよなく

玉葉冬　さほひ山にかけるゆふ霧の　月かけのこる峯の秋　太宰権帥雅孝

拾玉集六　玉川の里とはるかに見わたせば　月影の草の霜の影

続千秋下　秋風の吹きすさむ山風や　月影むら雲の影　兼鎮法親王

新拾冬　冬のつゝみもたえし夜すがらに　月影むらさき山のは　遊義門院

同秋下　秋寒き門田の面の秋風に　月影きよき旅の空　源中納言

新後秋下　さかきはの妻ともなく　月影の峯のかさ　前中納言定家

拾玉集七　清見がたかけもあらはに　月影秋の夜もすがら

続千秋下　さかえ久方の山風の　月かけはしらぬ志賀の浦　後京極摂政太政大臣

新勅撰秋　ありあけの空まてのこる　月かけあかき雲の影　前大納言為家

新拾冬　今宵こそ浅茅か原の　月かけなかき藤原　前大納言為氏

山家集　千鳥鳴く浦のなみの　月影なかき江の浦

新千秋上　風さそふ吹くかたの　月かけ清き里　式部卿恒明親王

続後拾秋下　吹く風もふもとの尾上の　月かけの波　永福門院

続千秋下　風そよくいく秋かけて　月影浜辺の山　前関白太政大臣

風雅秋中　雲晴るゝ山の端ちかき　月かけみるや宇治の川なみ　藤原秀能

新千冬　むらくもにかゝれる雲やさえて　月かけみかく布の白雪　花園院御製
玉葉秋下　清見かたふしの煙や消ぬらん　月かけみかく三保の浦波　後鳥羽院御製
風雅秋中　清見かた富士の煙や消ぬらん　月かけみかくみほの浦波　後鳥羽院宮内卿
拾遺愚草中　いつくとのひかりとさえてかの六　月かけはさやけき山への秋
玉葉神祇　春日山ちよのかけのえやこそ　月かけはすむ神の宮居　後深草院弁内侍
新葉秋上　あまのはらそらにまてそてなかめ　月かけ出て雲井の影　右大臣
拾玉集六　み月夜の空すみわたる風よの　月かけはすゝしき郭公のか　前大僧正慈鎮
風雅夏　夏深き森の松枝風さえて　月かけすゝしき鹿の声　平宗宣朝臣
玉葉夏　晴やらぬ雲かくれ行風のうちにも　月かけ出てさやけき夜の光　貫之
拾遺雑上　あかなくにまたき月のかくるゝか　月かげもあれはさやかなる　後京極摂政前太政大臣
続拾秋下　行きぬらんともなるさ秋の夜は　月かけはてしなき雲　伏見院御製
玉葉秋下　またきぬもあかつき雁の羽音にも　月かけのあさけすゝしき　法眼慶融
新続拾秋下　秋かぬる夜半とさえゆく袖の上に　月かけおれは秋のみ夜　法橋忠命
金葉秋　草枕ひとよのねさめしはの戸に　月かけおもふ身のすまゐ
拾玉集四　あかつきのしもよも寒く入ぬれと　月かけ外に月をそまつ　康資王母
続拾遺恋三　思ひくれ恋しかるゝ雲ゐの方の　月かけ外に面影そある
壬生二集上　いたつらにみなかくれぬるうちに　月かけそみえける
続後拾雑中　秋とへて老と成まて見る月を　月かけおもはしけるか　式乾門院御匣

拾遺愚草上　山の端のおもかけよりもまつかく　月より外の秋やなかめん　常盤井入道前太政大臣
続拾冬　かきくもりしくれて出る山の端に　月よりおれは秋の夜ふかき
続拾遺雑一　たれとなくわれをまつらんやと　月よりおれの今をいのへき　読人不知
風雅雑中　あきの空の夕月のかけになりて　月よりうへ雲の上の　徽安門院一条
新拾秋下　雁なくさえてかりかねのなかきて　月よりうすき真清波　中納言為教
壬生二集中　すみわたる夜半の木の葉の下露に　月より上は浪の秋風
新続拾秋上　雲さえて夕暮に光さしこえて　月より上つむ秋の空の雪　後京極摂政前太政大臣
拾遺愚草上　くもの上はなかめ入山のはしの　月よりのこる夜やなかるらん
続千羇旅　旅ねして山のはかけに雨なるの　月より外の秋もなく　惟宗光吉
月清集下　行へく入れのおなしくてそ秋の夜の　月よりの比そ山の月
拾遺員外上　雁さむのいつくにか秋の山の夕風　月よりうなはうきて
拾玉集七　おもひかね秋は一夜の袖の上に　月より落つ秋のまる
月清集上　ふる山の稲葉の末をこえて　月より落つ我袖の上
続千秋下　浦かぜのかけにまつ月を入道の　月よりあをし風や吹くらん　入道前太政大臣
新続拾秋下　秋の夜は音もさえて山の端の　月より清まる衣の袖　寛興院贈左大臣
玉葉秋下　かねたるも夜ふけて松の葉の　月より出て入にそ見ゆ　前左近大将兼教
千載恋三　おもひきてさへ入かたの雲の　月より出るまてこそ待　権中納言重親
拾遺愚草中　山端のみえぬ月すみかとめて　月よりまさ外にそ傾く

新千夏　あつさりしいつの外山の夕やまかげに　月ぞかりさえれ山のはのまつ　後京極摂政前太政大臣
拾玉集七　今宵こそ…月よりも…　月よりいりて…山のかげ　前大僧正慈鎮
月清集上　さえわたる…の草…かり…　月影もいかに寒えてむ見えん
続後撰玄　うれしきのさそらの空をいとゝ…　月もよしとてやるそてを　大納言通方
新拾雑中　我宿の梢も久しくなりにけり秋の夜の　月ようしもみるこのはにて　恵慶法師
拾玉集又　海よりはいりかたちかき山かげの　月よあかしもいつくなるらん
新古雑上　雲をのみつらきものとてあかす夜の　月よこずゑにをちかたの山　右大将忠経
新続古雑中　山のはに人をまちそめしこの里は　月にそてまたれぬるかな　式部卿邦省親王
続千雑中　みな人のさとを歎くはやくもりなん　月やまつてみ都やなるらん　亀山院御製
新後拾恋一　袖までもたちそふ涙にやどるかな　月を見ぬ涙かゝりける　為冬朝臣
新千雑上　光くもるあまつ空や昔のまゝなるを　月にたえしは世の流れの袖　西行法師
月清集上　花はちりぬつゆにうつるをめで　月にたとへる夜の枕は
新後拾秋下　雲かゝる四方の空にも山の端に　月はいでゝ秋風ぞふく　津守国助
拾遺愚草下　門田吹きもじけ乃風のなごり　月そ山かげに秋ぞしるらん
壬生二百下　山本のいはほの色もやすらん　月ぞちかくにみゆる月の雲　
続拾賀　雲かゝる人の都をさそふく空に　月ぞちよ世に秋をまちこゝにも　山階入道左大臣
壬生二百中　秋風に雲もはるゝぬ夜の月は　月そのかげそよきもかねの山

続千冬　旅のそらまだ雪山路に雪積て　月ぞしるべに見えしのそら　従三位範宗
壬生二百下　うき枕かはらぬ涙にぬれし袖の上に　月ぞやどりしあかつき西の
月清集上　花のゝえにやむすびの露のうつりて　月ぞつれなき遠山の山
続千恋四　かりねのまゝみしを別れ見ぬる　月ぞあさくもかゝりけり　浄眼行欣
玉葉雑二　浦風は浦の夜ふかく空にゝまして　月かゝる嵐に入りぬらん　賀茂氏久
新古雑上　藤衣いくとせ夜にもなれぬらん　月そのうちにあるかひもなき　宜秋門院丹後
山家集上　空のかげはるゝ秋の夜の月　月そのかげにみしみえん
新古秋上　いかにせん旅の海ぞうきなき　月かげにしみしかれ　皇太后宮大夫俊成女
新続古冬　袖の上のあらしもいと空や　月かげにこぼりてあらん　前大納言為定
新後拾恋三　いつもかくしほるゝ袖にやどるとは　月ぞこぬ夜のねざめもなかるらん　前大納言為定
新葉恋三　わすれてはうつるもわかれし　月ぞこぬゝ人すむ涙かな　中務卿宗良親王
新拾羇旅　旅人はまだふかゝぬ空の戸の　月かげ残りてあるかの空　前中納言為相
壬生二百中　山のはにまつ松の風も夜ぞ　月ぞうつる雲ぞまてゝ
山家集上　みし海のみすゝむもけぶりかな　月ぞ都なりてまたあるらん
続古羇旅　都のみ袖はきぬの秋の夕　月ぞひとりむすぶ有明の空　参議雅経
続後秋上　みなしくのまくらの嵐の枕かな　月ぞかりそ袖ぬれしかる　平貞文
山家集　うき世にはへん山のおくにても　月ぞすみける衣手もなし
新古恋四　めぐりあはん限りはいつと知らねども　月なへだてそよその浮雲　摂政太政大臣

後千同　うき人ハ影もなかれな秋の夜の　月あれハこそ[illegible]　従二位親子
新後拾雑下　[illegible]　月[illegible]　花山院内大臣
拾遺愚草　さ[illegible]　月[illegible]
花宴　こゝろいるかたならましかは弓はりの　月なき空にまよはましやは
風雅恋　[illegible]　月[illegible]　従二位[illegible]
後撰賀　[illegible]　つきせんかきりハ[illegible]　命婦清子
月清集上　[illegible]　月[illegible]
拾遺愚草下　[illegible]　月ハ入[illegible]
玉葉恋二　出る人のみ[illegible]　月の[illegible]　伊勢
金葉冬　冬の夜の[illegible]白雪ハ　月の[illegible]　神祇伯顕仲
後千恋　[illegible]　月の[illegible]　後嵯峨院御製
拾遺雑上　昔わか折し桂のかひもなし　月のはやしのめしにいらねハ　藤原後生
玉葉恋一　[illegible]　月の[illegible]　前参議実俊
新千恋　[illegible]　月の[illegible]　二条院讃岐
玉葉秋下　[illegible]　月の[illegible]　院内侍
後拾恋　[illegible]　月[illegible]　修理大夫顕季
月清集下　秋の夜の[illegible]　月[illegible]松風そ吹
新古冬　秋の色を払ひはてゝや久かたの　月のかつらに木からしの風　藤原雅経

新拾冬　白妙のひかりそ添る冬の夜の　月のかつらに雪つもるらし　後嵯峨院御製
新千秋上　見るまゝに雲もかゝらす[illegible]　月のかつらや払ふ秋風　中[illegible]宗
拾遺愚草　[illegible]　月[illegible]
壬生二百中　天河[illegible]秋の夜ハ　月の桂そ[illegible]
後撰秋中　[illegible]秋や[illegible]　月の[illegible]　紀淑光朝臣
新後拾恋上　[illegible]　月の[illegible]　民部卿為明
新勅冬　雲井よりちりくる雪ハ久方の　月のかつらの花にやあるらん　清輔朝臣
長秋詠藻下　空晴てちりくる雪ハ久方の　月のかつらの花[illegible]
拾遺愚草下　[illegible]　月のかつら[illegible]
同　[illegible]　月のかつらの[illegible]
新古恋　[illegible]　月[illegible]　前中納言匡房
拾遺愚草上　[illegible]　月のかつら[illegible]
新勅冬　秋の色の[illegible]木枯に　月のかつら[illegible]　前大納言忠良
玉葉雑一　[illegible]　月のかつら[illegible]　賀茂氏久
新千恋　[illegible]雲井[illegible]　月のかつら[illegible]　順徳院御製
千載雑上　何と[illegible]　月のかつらの[illegible]　藤原親盛
新後恋　[illegible]　月のかつらの[illegible]　皇太后宮大夫俊成
続千秋下　[illegible]　月のかつらの秋の[illegible]　前大納言為家

新勅秋上　乃かまにきえのうゆくさの　月のかつらは秋のもみぢして　藤原資季朝臣
拾玉集六　秋乃さやけくもらぬ空や空なれ　月のかつらハ紅葉しぬらん
続後拾秋上　いつ秋もかゝすまさりてしくれ　月のかつらやちりもはてなん　普光園入道前関白左大臣
拾玉集三　うちしくれ村雲かゝるもみぢ葉　月乃かつらも色まさりけり
続後撰秋中　天乃原雲ゐをかけて吹風に　月のかつらも花のをそきす　後久我前太政大臣
続後撰秋上　曇なき露にかひなく照り入に　月のかつらも花や咲らん　きのつらゆき
新古秋上　あきとのみ秋のなかはをすくるさに　月のかつらもかゝる光りに　皇太后宮大夫俊成女
壬生二百首　霜のゆく秋のかれはぬ夜の月　月のかつらもてりまさるらし
風雅神祇　久堅の天津日吉の神まつり　月乃かつらも色ぞかはれる　入道二品親王尊円
出家集下　うき世にもかゝるさえとも照月は　月のかつらもをなしかるらん
続古秋上　ふるさとの月のみやこのかつらこそ　月のかつらも秋をまつらむ
新千五三　雲ゐより心にかゝるかつらきに　月のかげしもなかき夜の空　大納言経信母
続後撰秋下　よみちをにまよふ月のかげ照ぞ　月のかつらはそれかとやみる　二条院讃岐
風雅夏　ちりもせぬかつらさかしに久方の　月のかつらもつゝみかぬれ　よみ人しらず
新千秋下　さやけさを秋とおもひてさえぬらん　月のかつらも秋は深しき　従三位盛親
新拾秋下　さやけしや八月なかの月なれは　月のよさかりには紅葉ちるかな　権大納言資平
新葉秋下　さやけくも八月の月なか空に　月乃よさむは衣うつなり　後光明照院前関白左大臣
玉葉雑二　冬ゆかるきのふのさくら月ハ　月のよみちに花の咲らん　院御製

月清集上　秋の夜はさやけき空の月のかつら　月のかつらもかゝるけしきに　後京極摂政前太政大臣
新葉秋下　わが袖はやくもたまらぬ露かゝり　月のかつらもなびきぬる雲に　後村上院御製
続千秋上　久方の空乃月の光さやけき　月のかつらも秋のにほひぞ　播磨内侍
新拾秋上　曇らさる雨ことにはれやるまに　月乃かつらも我影ぞする　権中納言公雄
新葉雑一　下もえの蛍の影にみえてこそ　月のかつらも紅葉しけれ　右大弁季光
新勅秋上　いかにしてもあらしとこそ思ひしか　月のかつらに我はなりけり　源光忠朝臣
続古雑一　この山の宿のかつらに秋ふけて　月のかつらも色もすみける　よみ人しらず
新葉雑一　みやこ人あつまりて洞とよむ　月乃かつらもぬれつゝさかん　妙光寺内大臣
月清集上　浮雲の光かけあかし此時ならく　月のかつらも雲もみかくる
拾遺愚草　萩乃葉のすゑの露さへ秋の夜の　月のかつらはまたもにほへり
続後撰秋下　うつりゆく雲の夕べや秋の夜の　月のかつらもさかりなるらん　よみ人しらず
玉葉秋下　雲の空ふりてこそみれ新月の　月のかつらや秋の山かけて　入道前太政大臣
同雑二　ながめても心のうちにくもりなん　月のあかりそやまてすれる　西行法師
新葉秋下　さらに浦の渡の梶もまたあけぬれは　月のかつらはさきや日ぞ　妙光寺内大臣
続後撰秋中　秋の田の露のおくては秋乃かつら　月乃やどりかりそめにかる　後鳥羽院下野
新続冬　松島やしほ海の浦ゆくる波乃　月のかつらにたちどり鳴なり　皇太后宮大夫俊成女
拾玉集六　あかなくも松の嵐に雲消て　月の氷はみがきそへけり
新千秋上　大井川さやかにうつる秋の夜乃　月のかつらにかゝる波かな　前大納言為世

壬生二百上　沖津風ふけゐの雲ともなく哀　月は氷よりさえて海の上

続後撰秋　辛崎やにほてる沖に雲きえて　月の氷に秋風そふく　後京極摂政太政大臣

新拾遺秋下　ちれはよる神代かきりし龍田河　月のこほりに氷くたかく　後京極摂政前太政大臣

続後拾遺冬　まよひくる宇治の網代の網代木に　月のこほりもよるそみえける　常盤井入道前太政大臣

風雅秋中　夢もおくも今さしのほる山風の　月のこほれる松のつゆかな　院御製

新後撰羇旅　いつくにかあかしかねてやみやこ出て　月の影のよるにそこえて　心海上人

続古今秋上　空のあまのきよくもおもふなる世に　月のてらすの雲よりそ　後鳥羽院下野

玉葉秋下　紀乃国や由良の湊に風さえて　月はてゝ浦の雲もなく　前内大臣

拾遺風体上　おもるきむらのやとの露にやとる　月乃影もて袖そぬれける

風雅秋中　秋風の雲をも空に雲きえて　月はあまりの一筋　二品法親王覚助

山家集上　いとへともさすかに空に山かけて　月はあまりの影もあさり

新続秋下　見る人の心をつくす空にかかりけれ　月はあまりの空の浮雲　法皇御製

新続古今雑上　小倉山山のはにたつ浪ちかき　月はあまりのさむけの光　宗仲法師

風雅神祇　ゆくらも塵にまじはる神垣に　月はささりもいはふかな　熊野法師

続拾遺雑一　秀おもはまてれぬちりやとる山の　月のさかりはいそねらむ　源頼春朝臣

新葉哀　山のはの雲も霞もきえてゆく　月乃さやかに秋の世の空　冬良公

拾玉集三　いつまりをしのふる秋と惜む夜に　月の露のうつれるかは

花宴　世にしらぬこゝちこそすれ有明の　月の行衛を空にまかへて

壬生二百中　しらくもはさえ行空に氷ゐて　月はみちぬる山の端

須磨　いつかたの雲ちにわれもまよひなん　月のみるらんこともはつかし

金葉秋　ともすれはいつくもよもの山の辺に　月のこゝろ山のはをゆく　権僧正永縁

新拾遺秋　あらしのみひらけもてゆく静にて　月のみやこをさりもやらぬ　中務卿宗尊親王

続千載　ふきさそふ夜半の浦風さえて　月はみやこのあかしの浦　待賢門院堀河

須磨　見るほとそしはしなくさむめくりあはん　月のみやこははるかなれとも

新千載秋　こよひたにかゝるそら風の通ひ路の　月のこよひはいかにか　後宇多院御製

続後撰秋　天津風みちそてけふひさかたの　月のさやかにてらすらん　後京極摂政太政大臣

新千秋上　久方の月の雲井に雲もなく　月のさやかに秋風そふく　順徳院御製

壬生二百中　河ちかき浪の夜ふけぬる　月の影よ空にみちやる

長秋詠藻下　秋の夜は空よりもみつへの　月の影よ空もかゝらん

続古雑下　むかし思ふ庵の風の雨そふるや　月のこゝろにもみはてぬ　西音法師

続千羇旅　いつくにも旅のやとりの西の方　月のみやこは空かけり　前参議雅孝

同　河もあれはあきの夜もしるへ　月はみやこの夜もすかれ　丹波忠康朝臣

月清集下　足引の山のあなたにうつりしも　月は都にかへりかへり

新古秋上　なかめつゝ思ふもさひし久方の　月のみやこのあけかたの空　藤原家隆朝臣

玉葉雑一　なかなかにみしはの庵にすまひして　月はこゝろの秋のうち　藤原秀武

長秋詠藻下　白雲のつゝく海まて天の河　月は銀のくもりかな

風雅秋下　ゆくかりのひとつらもなくそらにあふらん　月のこゝろもこゝろあるらし　従二位家隆
壬生二品中　秋風の吹ゆく空にくもらねは　月は天人の衣とやみるらん
新葉秋下　難波江や芦の浦風さむき夜は　月のみかけはさらにさえつゝ　新宣陽門院
玉葉旅　まろねしてみるよしもなし浦波に　月のかけをしまちてぬる　中務卿宗尊親王
拾玉集二　山のはや天の川瀬の嶋かくれ　月のみ舟は漕てわたる
壬生二品下　みなかみのしらぬ末の世よ　月のこゝ清き秋のそらかな
新千載雑中　いにしへの人のためしにかはらしそ　月のこよひや広沢の池　従三位頼政
続後撰雑上　我ためとさてあるそらの山の木の風を　月はなくてや出にけらし　藤原信実朝臣
風雅秋中　すみのほるまゝにさえゆく　月の影さゆる枝の梢かな　侍従隆祐
新千載雑中　いつもみし秋にはにたるよの中にて　月のこよひもみえてありけり　二品法親王覚助
続後撰冬　とほくなるこゝろもしらす　月のさえまさる秋にまさるらん　よみ人しらす
千載秋上　白雲と峯の桜はみえしかと　月はひかりのへてそさやけき　待賢門院堀川
続後撰秋中　女郎花ひらくこそはまさる秋の夜の　月はひかりに雲かくれつゝ　よみ人しらす
拾玉集三　さしもなきみやこもあれはさそひ　月は光の広沢の池
続後拾遺秋　実方の北の世のなにひとつもあれは　月のひかりのすめるうへてそ　前大僧正良信
新古秋下　秋の夜の衣さむしろいつまてか　月はひかりのよそにもかはる　大納言経信
山家集上　さらぬたにあはれなる秋の夜は　月の光のあかりまさりて
壬生二品上　手をとりてみれはまことに　月の光そあはれなりける

拾玉集三　たかしほの出る秋の夜は風にみなと　月の光のよるもかゝれり
玉葉秋下　海のはて空はひとつに秋の夜は　月乃ひかりはちかきそらかな　従二位家隆
千載秋上　秋の夜や天の河瀬はこほるらん　月のひかりのさえわたるかな　藤原道経
山家集上　夜のほともとはかなく雲のうへは　月の光はさえまさりけれ
後拾遺雑一　みる人はほとゝきすとて千世にふる　月のひかりのさやけさは　源師頼朝臣
続後撰夏　夏の夜のあまの岩戸のあけよかり　月はひかりのさやかにも　土御門内大臣
風雅夏　まきの戸をとさゝてそたゝく水鶏　月はひかりのさえわたるらん　郁芳門院安芸
拾玉集三　さらしこの今宵はあやなくさえん　月乃光の雪よりもしろく
拾遺冬　冬の夜の池のこほりのさやけきは　月のひかりのみかくなりけり　もとすけ
山家集上　あるの海の原鳥しまよりおもひやる　月の光はひかりのうへ人家
壬生二品上　ゆふされは秋やちかくなりぬらん　月は光はさしてそさやけき
拾遺愚草上　あつまのやいさよふなみの時しけれは　月は光もかゝりけり
後拾遺秋上　まむなしくも秋のみかは山さとの秋のよ　月はひかりもさえわたる　藤原範永朝臣
新拾冬　久堅の空さえてよるはの松の枝に　月はひかりも雪とさえたる　祝部成仲
山家集上　いつもかはらぬのに秋のそらへき　月のかけすみける広さ
山家集　まきれやの野辺の花をとまて　月はひかりさえてやゝのかけ
詞花雑上　あさ月は空のなくてさえたるに　月はかゝりしそうきてぬかるる　大蔵卿匡房
山家集上　くもりなく照る夜のあけゆくかけて　月はかゝる（？）もとまりてのこれけり

拾玉集三 さゝ浪やよる浪かけて風雲 月乃関もりもなへかりなり

壬生二家中 冬されはさえまさりける村雲よ 月はさえぬれみえてなきかな

続千秋下 とく露のこほる深草里あれて 月のさむけきをかすむらむ かね何法

玉葉冬 冬枯のさひしき山里より 月のすむしも衣かへぬれ 西行法師

山家集下 うき世をはいとひ[illegible]ぬ 月のすむへそ[illegible]

続拾遺雑 なかくてはわれもたのもしく 月ならす千鳥乃声かな 和泉式部

壬生二家上 梅乃えれれは[illegible]白妙 月やむかしもあれはこそ

月清集上 今こんれはかひこさむそ[illegible] 月やむかしの月の[illegible]

拾遺雑上 その時とおもひはなれぬ 月やうつきしもかはらん 西行法師

新勅雑一 わかうちぬ我れそうしもむすき 月やむかしと見えさらん松の山

月清集上 さひしさにふ人の影をすみや 月やいともぬれは涙ちおもそ

新古秋上 人わかそまれおもわかまのれ 月やかれかへぬれぬ松の 文治卿

続古賀 君か代のまさおれはまさきそ 月やかれまかすわかる池水 経朝入道

新古秋上 秋の田かりねの床のうすいろ 月やともそまりなる露 大中臣定雅

拾玉集又 秋まそて霜をまちさる海の袖よ 月やとらせすわすれむるらん 俊成

続後拾秋下 山路のはるかれのをかき袖よ 月やかゝしと照まさるらん 源親衣

新拾秋下 里人のきぬこのさともいそかて 月やよきむの霧とこそん 権中納言具行

続後拾羇旅 草枕おくつき露よおもそいふあ 月やたひねの袖とこそさらん 了雲法師

続拾遺三 かのあも忘れぬ程を手まくらの 月にはさらにかゝみあるらん 左京大夫道雅母

新拾秋上 たえぬ世まてよりよも秋のまれ 月やむかしれかゝみなるらん 大納言経房母

金葉秋 なかれいれはほしぬまもなかりき 月やむかしのかゝみなるらん 藤原有教母

新千載雑中 大かたのはれやれ忘れぬをき 月やむかしれ人はなりなん 太宰大弐高遠

千載秋上 石はしるゆくへもしらぬ川の音まて 月やしらぬぬれ夜なからん 藤原為時朝臣

拾玉集又 露こほる雲の下水ぬれそちて 月や山端かくれなるらん 定家

壬生二家下 おもき風吹きよせ宮に風まそ 月や海とまちかねるらん

風雅秋中 たゝ人もよ袖の露をまよれなき 月やそのよれ続なかるらん 崇徳院御製

拾玉集七 まもり露もれそゝ洞の袖のかよ 月やおもぬよともかまは

新続古今雑中 老ぬまた我かからもかまもなし 月やおかぬとゆるかるらん 前中納言定宗

続後撰雑 秋の夜そと涙れ空ちなすみて 月や山なれ今はむ拝 左京大夫顕家

新後拾秋上 風のしまもあるらぬ山の川 月まちそつさしかの里 土御門院小宰相

同雑上 いとくさひしやそなむ岩よ 月まちつゝ又かの花 津守国助

拾玉集四 谷山の木の下ふれ夕まくら 月波にそいつゝらもせん

風雅雑中 たゝ松葉の庵のまへに 月まちそかし深山人 前大納言為兼

続古今羇旅 ことのえれとせそ山の林薬そ 月まちまちそ雅かさうき 前大僧正覚忠

月清集下 風もたえぬ山城やぬまさ月の 月待ちてす袖れ白露

新葉雑上 日数あらて川の浦の波みなれ 月まちそこひておもはぬ人 前左兵衛督

山家集下　ふけて出るみ山もみねのむら松は　月待えてそ心ちこそすれ
玉葉夏下　樗花明てしらむ山の端に　月まちえてもなかめよは哉　橘為仲朝臣
新拾雑上　夕日影雲にかゝれる松の端に　月まちえても秋そさひしき　前大納言経顕
玉葉秋下　風さわくいまさへ出ぬ山の端の　月まちえたる秋の風　平宣時朝臣
新古秋上　かつらきや峯も出ぬ秋の夜は　月まちいてゝのとかなる哉　上東門院小少将
後拾遺雑　やすらひにかくてぬる夜の山の端の　月まちいてゝのとかなる哉　加賀左衛門
新葉雑上　山陰にやとりとめけん　月まつよひの心細さを　光明峯寺入道前関白
続千雑上　芦のやのなにはのうらに立ほりて　月まつよひの空なかめつゝ　大江政国女
拾遺雑上　秋のはていつの世いつか月影の　月まちえてそ心ちなりけり　具親
新古雑上　なかめのこれも心をおもひやり　月まつ家の月の影なん
拾玉集六　浮雲をさそふ風に月もなし　月待山の峯にあさせ　従二位家長
新後冬　あかなくもなからんさゆる夜の　月まちえて峯の白雪
拾遺愚草上　夕やみになかてとをく月は　月まちまちて山のはの秋の
新拾秋下　くれてゆくかたもすゝめの　月まちえてゆく夜半の風　西行法師
新後恋　やすらひに出なん人そあかつきの　月まちまちて入の影　蓮生法師
続後拾雑上　今そゆく秋の月影の宿ならは　月まち人の心なるらん　野宮左大臣
新後秋下　風さむきよもきか杣の宿ならは　月まちえてや衣うつらん　藤原為頼
風雅秋中　うちそよく竹の葉の露の音　月ふくる夜のあきも身にしむ　前大納言実家
玉葉秋下　まきの戸をさしもせぬ山の　月まちかねて木のまをみれは　従二位隆博女
新続古今羇旅　あつまちのなかやまこえてみるやとに　月もみちをしるへにそ出る　法印定為
月清集下　夜の夜は明石のとまの浪まくら　月吹送る松の嵐
古今物名　秋の夜はすみ行空にをりはへて　月なからの秋の夜の月　紀のよしもち
壬生二百中　山のはにまつことなくもあらなくに　月吹く雲の秋の嵐に
千載秋下　名もたかき秋の半もすきぬれは　月をまたてそみにもありけん　式子内親王
風雅恋三　あまのとをおしあけかたの　月まつよひのいたつらにして　藤原隆祐朝臣
玉葉恋上　なかむれはわか心さへはてもなし　月そなかめのたよりとはなる　後京極摂政
新勅恋下　いつまてかわれをたのめの言の葉を　月そたのみのすゑの空　和泉式部
玉葉春下　数ならぬ身にもあはれはしらせとや　月そかすめる雲の夕暮　源光行
続古今羇旅　神無月しくれもしらぬ　月そ照ける秋の夜の月　宮内卿家女
新後羇旅　さそはれぬあたりのさとの夕暮を　月そさしいつる山の端の　大蔵卿有信
新拾恋一　いかにして涙つゝまん　月そなかめのよすかなる　前大納言為定
新続古今恋上　なかむるに人もこぬよの　月そさやけき秋の夜半　山階入道左大臣
後拾秋下　難波かた入江の芦のわかはにも　月ぞてらせる秋のうら波　今上御製
拾遺恋上　すみなれしあとは昔の宿ならて　月そやとれるひろ沢の池　前大僧正慈鎮
玉葉秋下　深きよのおもひしれる杜の　月そあはれに見えてかなしき　前参議忠定
風雅秋中　常盤なる山かけの松の　月そあはれは身にしみける　前大納言為氏

壬生二巻中　大かたの晴ゆく夜をも久かたの　月こそ秋はさやけかりけれ
新千載三　今こんとたのめし程もすぎぬるに　月こそ人の契なりけれ　大江千廣
続後撰恋　待まさるとひても今はうき頃の　月こそ人の形見なりけれ　因大下
続後拾秋下　あかなくに夜半もみえつる秋の夜は　月こそ人のこころなりけれ　御製
長秋詠藻上　涼しさにとまらぬ秋のかたみとて　月こそ袖にやどりなれけれ
続拾遺秋上　志かすがに人をとひこそ峰の松の　月てらしけり海士の釣舟　左近中将公実
新拾賀　ちかくとも入るをばをしと思ひつゝ　月てらすなる海士の釣舟　清輔朝臣
新拾冬　今よりはもみぢもちらし白雲に　つきそふ夜半の雲の岩橋　花山院内大臣
続後撰恋　こぬ人をまつとはなくて待ちし夜の　月てらすらんみなとのあかつき　太上天皇
新拾冬　冬きてはまさごのあらしも山の世は　つきさえてこそ氷る日影に　山階入道左大臣
続古今冬　思ひあまりながむる空もかはらねば　月さへかゝる袖とひとりは　権中納言国信
新後拾恋　かはるなる秋の月のつらさまで　月さへかゝる影やなしき　慈鎮和尚
山家集上　いかにして行にし山の世を出ん　月さへかゝる世をや厭はん
玉葉雑　世中の世をそむきなばとて　月さへかゝる影をりもしらじ　高辨上人
続後撰恋　駒とむる日のくれ川の瀬清み　月さへ影をうつす浪かな　権中納言長方
新勅雑一　我まつる花ともえで又なれど　月さへかけのかすみ染めて　法印慶忠
新後拾雑春　君が代の雑のえぬ霜にさえて　月さへかけのやどりぬらん　後西園寺入道前太政大臣
拾遺集七　名も高くて桂の山に木かくれぬ　月さへ入りぬる秋の空かな

壬生二巻上　見るまゝにふかく入ぬる山のはの　月さへ空にをしまるゝかな
拾遺愚草員外下　夢かとて見しもの荻の葉そよぐなり　月さへ袖におくつゆのかり
千載雑上　海はれて浦山しげく雲まよふ　月さへ今はひとりなるらむ　法眼長真
新後拾恋三　あはぬ夜のつらさの秋の霧に　月さへ今はへだてありけり　前大納言為氏
新葉恋　時しらぬ山路の雪をふりすてゝ　月さへかくす宮のうち川波　宗良法親王
拾遺愚草員外上　よそにても思ふ心はさそはれず　月さへあらぬ袖にやどらむ
続後撰恋　山の端にかへる心のおくもなし　月さへあらぬ旅の空　藤原信実朝臣
月清集上　難波がた芦の葉わけて出し浦に　月さへさやかに人に影
続千載恋三　西の山も影をぞ見るといふなり　月さへ人の面影にして　道義法師
拾遺愚草　さしのぼる月のみかげもかはらぬに　月さへあかでくもりけるかな
千載雑上　なにをかは桜井のはし清水みえぬ　月さへもかゝる神無月　俊恵法師
山家集下　秋風の更けゆく空のうらむれば　月さへすみて宮のうちなる
長秋詠藻　みがきなす心も清くうつしとる　月さへすめる住吉の浦
千載神祇　住吉の松の千歳のあらはれて　月さへ今ぞ霜をおくらん　俊恵法師
新拾冬　霜さむき空の夜半に嵐ふく　月さへ今ははるかなる雲のうへ　前大納言為家
拾玉集五　秋毎にめでてなぐさめたりし身は　月さへゆかしからむの嵐かな
月清集下　雲の上に御神のみやをまもる　月さへ心の影に宿るらん
千載雑上　はれてまた雲井にかへる宿の上に　月さへゆかしかるべき雲の上　覚性法親王

拾遺愚草上　いつのまてぬ人もとひこぬ宿なれど月さへ入ぬ秋風ぞ吹

月清集上　大空にかすみもやらぬ風の秋の夜は月ゆへかはる色ぞ見えける

新古夜　郭公なきてこそ山の端は月まちいでて鳴かとぞ思ふ　前太政大臣

山家集上　うちつけに又こん秋の空ぞみる月ぞあはれなる命なるらし

新拾巻二　なかなかにたのめてきけばむかしだに月をぬるるも袖のうへかな　後京極摂政

月清集下　うれしきに我ものとては月見ぬ秋はなかりきこの世には

続千雑上　かぞふれば年ぞひさしき月見るや　入道前太政大臣

続拾遺雑　ふけゆかば月にとこそは思ひしか月をぬるきみとふらん人　藤原隆房朝臣

同秋下　すみなれし月のみかは秋の夜も月をみつつやねられざりけん　藤原家隆

続後拾秋下　老となる身をもしらで秋の夜の月をながむる我ぞはかなき　前参議経信

玉葉雑又　ともに見し人のまちし月かげに月をみるらん人は恋しき　前大僧正慈鎮

新古冬　霜雪の夜はふけにけり冬の夜の月をみるにもさびしき雲ゐ　曽禰好忠

続後撰夜　又月をまちし雲の跡なる秋は月見る袂かな月見るたびに　順徳院御製

山家集下　露ぶかき秋のうき世に袖ぬれて月みるにも物思ひつつ

続拾巻四　ながめつつ又思ひいでて秋もなき月ぞあれなる袖のぬれけん　太上天皇

続後撰雑　老ぬれば月にまかせて秋のよの月ぞあはれなる涙なりけり　藤原[illegible]

風雅巻二　忘れじとおもひしこと思ひつつ月見るにたよりあらん　源和氏

新後拾秋上　空にのみ月も袖ぞぬるゝ月をながめておもふ秋の夜　法印[illegible]

続千秋下　都にもこよひやまさる月の影月にぞみゆる道のまどひも　藻壁門院但馬

拾遺巻雑上　うき雲のたちかくれなば月みるに雲の上にてみるらめ

山家集下　晴やらぬ雲まにみゆる月影を月みることもなくてやあらん

玉葉巻又　袖ぬれてねぬよの月をよそにしてかねてぞ月の影をまつかな　中務

同雑一　花の色にあかでやみにし月のみを月をまつとは人もしらずや　藤原[illegible]朝臣

新葉秋下　かくてしもすみける月の影ぞとて月みる人のいかにみるらん　中院入道一品

新千載雑　さらばぞこそやまの端をいでし月見るとてもあはれとぞみる　贈従二位為子

同又欽　名のみしてまた雲井のみ月ならば月みよとてもなくなくぞ見る　源兼氏朝臣

金葉巻下　いつとてもながめはつきぬ月なれど月見ることに袖ぞぬれける　内大臣

続後撰秋中　須磨の浦の月に心のみだれつつ月をみるにも身を思ふかな　太上天皇

新古雑　都をばみなみにのこし月をみる月をみしよにおもひいでつつ　後入道

千載賀　みな人もしられぬ程に月かげの月をみるにも雲もかかれず　賀茂成助

玉葉雑　引くらべ花も紅葉もなき人にさそはれぬべき月のあはれは　西行法師

新古秋上　そのかみのあはれなりける秋の夜の月みるたびに思ひいでつつ　和泉式部

新後巻三　ながめても思ひはなれぬ山の端の月みるそでのうらむらんとや　昭慶門院一条

拾遺巻雑　いかにしてそれも又わがひとりのみ月みてあかす秋の夜半かな

玉葉秋下　ながむればこよひの月もかはらねど秋のよすがら月ぞさびしき　道因法師

新後拾秋下　秋の夜の月にかくこそおもひしにつれなきものは月のかげかな　中大臣家備後

風雅雑中　なく鳥ハこゑさき梢にあきおちて　月さへつらくあかつきの山　太上天皇
拾遺員外　秋の夜もまつの木かけにむかふとも　つきてしらぬ月日は秋そなかりし
玉葉秋下　風にぬる萩の下葉に秋ふけて　月さへくもる秋そさひしき　従二位親子
詞花秋　春くれは京やいかならむ秋の月　月なかりせは見すやあらまし　左京大夫顕輔
拾遺愚草上　久かたの天つみそらの山の桂葉も　月日の行をいかにかはりぬ
新後拾賀　いつまても君かよハひは月日に　月日まさりてつきせさる覧　前参議基政卿
新後拾賀　はるかなる千とせをかけて君かため　月日かさねてつきせさりけり　前参議秀長
玉葉賀　恒にきくこそまことなりけれ　月日にそへて今も絶せぬ　堅明親王
続後撰雑下　あはれ山の月のかけ出る空をまち　月日とともにうつる形をなかめつゝ　前参議基綱
新古賀　かきりなきさかのみちの君かよに　月日つもりてあさき言の葉　権大納言大中臣
新後拾賀　三笠山いつもかはらぬ光りにて　月日とともによものやもめを　法性寺入道前関白
風雅賀　くもりなくてらす月日の光にて　月日ともにうつるこの世に　後山本左大臣
拾遺愚草上　いつもたえぬ桜の花をさかりにて　月日とともにゆくすゑのかけ　橘仲遠
続後撰雑　ともにおもふ神とまもりて　月日ともにさかふるのをり　前中納言匡房
千載賀　ちとせふる松のみとりにたえぬかけ　月日ともにかはらさりけり　後京極摂政太政大臣
新後古賀　神風やみもすそ川のなかれにて　月日をみよのひかりさしそふ
拾遺愚草下　さためなきつきのかけにそしるへき　月日をおくるみとせにそ見ゆ　三位季経卿
山家集下　わかやとにすみける月を見てし　月日を送る我と成らん
千載賀　君か代ハ千代にひとたひあふねとも　月日とおなしかきりなきかな　権中納言伊房
続拾雑上　神代より照りつくせぬ光をは　月日ともに猶そこの山　正三位知家
続拾雑下　老の入るまてもえてらすかは　月日そへてもいかてすく覧　法印源承
拾玉集一　ゆくれハ西にかたふくかけさへも　月日もろとも入かたの跡
月清集上　難波潟芦のやへ葉のしけき身に　月日の入るを思ひいてゝ
風雅雑下　さらぬたにあつき思ひにみたれて　月日のうつりかはりぬ世なれ　前大僧正道玄
壬生二条下　君か代の程をかきりにいくとせの　月日のかよひ路の入ぬ道
新後拾雑　行末をかけてたのめハうつりゆく　月日のかはるよ世をやすくさん　道雄法師
新拾冬　くれぬとて今さらいそく今年かな　月日のゆくもまたもかへらぬ　前中納言為定
拾遺愚草二　まちえても思ひはてゝおもひぬれは　月日のみつまてうつりゆく　人まろ
新後拾哀傷　限りあるかけをたのみの世をなれは　月日やきみそれかけかなへ　権大納言忠光
壬生二条上　いつまてん人のいのちのはかなさは　月日もなれかけてかはらぬ世は
新古雑下　ゆくすゑは空にしられぬむかしを　月日もうけて今はなかるそ　太上天皇
同哀傷　冬のよのあはれにおもふ君かよに　月日もすてゝ忘られぬ人　人丸
新後拾雑上　神代のまゝにすむ秋の月のみて　月日もみつ野のよしの　太宰権帥俊光
拾玉集六　あまのはらしらぬ袖のかけまて　月日もともにくもりぬる哉
玉葉秋下　雲の上にすむ秋の月千代の影　月日もいつとすみわたる覧　太宰権帥雅孝
同雑一　あらためて我世をさかえとなりゆく　月日もいまにつもりの山かけ　前大納言為良

千載恋五　なしみのけはしたるぬ別かな　月もいまはの有明の空　摂政前右大臣
長秋詠藻上　このまよりみゆるみなみの　月も仏のちかひなるらん
続千賀　池水にみぎはの松のうつるかな　月もちとせの影やそふらん　順徳院御製
拾遺愚草員外上　いつくとか渡りても来む氷まで　月もあらはす世にあるべし
新後秋下　霜結ぶ山の四方の　月のかげ　前大納言為定
新葉雑上　神垣やあはれ(?)の袖の　月のかげ　右近大将長親母
新後古今三　きぬぎぬの袖の涙にかけてこそ　月もわすれぬ有明の空　讃岐(?)
新千雑上　なにとなく人もとはぬ　月もいつかは　永福門院
新後羇旅　草の原かり寝の夜のやどりそ　月もみ(?)えぬ　大江(?)
続千秋下　かりそめの宿は昔の名残にて　月もうつけそうき　後久我前太政大臣
壬生二集中　雲の上の月に(?)　月もかはらず
玉葉羇旅　かりそめに(?)　月もなくてか　国宝(?)上人
拾玉集二　さびしさは　月も
続千雑　　月も　今出河(?)院
拾遺愚草上　かねてより　月もよ　
新後雑上　　月もよ　権大僧都(?)
新千秋上　　月もたまる　前大僧正慈(?)
千載羇旅　かり衣袖のなみだにやどる　月も　崇徳院御製
同　ちはやぶる　月のみかげや　中納言師俊
新古神祇　石川やせみの小川の清ければ　月もながれをたづねてぞすむ　鴨長明
新勅恋　　月もすむらん　正三位家(?)
新千恋　かけて　月もむかし　権大納言(?)
同雑上　今夜こそ今年の秋の　月もむかし　前大僧正実超
新拾雑上　老らくの　月もむかしや　法眼宗信
続千秋下　秋萩の花野の露に　月もうつるや　皇后宮
続古雑中　何事も心にとめてあはれなる　月もうき世に　中務卿親王
壬生二集下　いつもかはらぬ　月もうき世の
同　よそながら我宿の　月もうき世の　津守国助
続千羇旅　涙こそ袖のみなとを　月もうきねの
拾玉集一　思ひ入る　月もうき
新千哀傷　　月もなれ　前大納言為世
新葉秋下　吉野河　月もてらす　前大僧正成助
拾遺愚草下　さとりゆく　月もや
月清集下　思ふことありあけの　月もや
拾玉集一　我のこと　月も宿
続拾雑上　我つゆの　月もやどる苔の袂　法印公澄

新後拾遺 秋 思ふ事なくてや見まし 月や人の老となるらん 前大僧正道玄
山家集上 ませのうちに 月もかりにや宿る菊の上
壬生二品中 衣うつ 月も氷と
長秋詠藻 中 月もこころ
新勅撰 秋 月もさやかに 中納言
続後撰 秋 秋の夜の 月はそれて 従三位
続千載 秋下 わたの原 月もみて秋の 従三位
玉葉 雑 月もあはれと 後京極
新拾遺 秋下 月もあはれ 大納言
拾玉集七 月もあけ
新拾遺 秋下 月もあはれ 太宰大弐重家
壬生二品下 月も嵐も
月清集上 清見がた 月も嵐も
壬生二品下 月もあはれ
新千載 神祇 月もあかで 荒木田氏之
続拾遺 雑中 老ぬとて 月をさへ 常盤井入道太政大臣
山家集上 雲晴るる 月もみな
玉葉 雑一 思ひつつ山の 月もみやこ 入道前太政大臣

続千載 雑中 うき身には袖に涙をかけそへて 月もみしよに 按察使中納言公雄
続後撰 雑上 なかなかに 月もさらに 法守
続古今 冬 かくれなき 月もさらに 二条
壬生二品下 暁の 月も雲井の
山家集上 氷しく沼の芦原風さえて 月も光ぞさびしかりける
続拾遺 神祇 神路山 月もひさしき宿の池水 按察使長方
新後拾遺 秋 [illegible] 月も 為道
玉葉 秋上 麓の [illegible] 月も秋の山里 西行法師
壬生二品中 清見がた 月も雲
続拾遺 羇旅 末遠く つきせぬ 思順上人
同 秋 [illegible] つきせぬ 前大納言為経
明石 [illegible] つきせぬ
山家集下 [illegible] つきせぬ
拾玉集七 [illegible] つきせぬ
続後撰 羇旅 君がため つきせぬ 貫之
拾遺 恋 [illegible] つきせぬ
新後拾遺 恋一 [illegible] つきせぬ
拾玉集七 山の [illegible] つきせぬ 同

新古雑下　いつまでて今まで世にはふる身の　つきせぬ物とおもひけるかな　前大僧正慈円
拾玉集六　あきの夜のつきのひかりにさびしきは　つきぬ思ひの我涙かな
新古恋二　思ひしる人ありあけのよなりせば　つきせず身をばうらみざらまし　西行法師
金葉賀　あまつ波の音楽乃枝も住なれ　つきせぬ君がみよのながれか　後冷泉院御製
詞花賀　あまつ波のおとはの千世もちよに　つきせぬ君がみよの代に　同
金葉雑上　よろづ代をまつとさためてそのこころ　つきせずとりかへすよしもがな　皇后宮美濃
千載秋上　なにたちもおもはぬなかの秋の夜の　つきせむ風のおとにぞ　右近大将実定
山家集上　いつもきくふもとのさとのあさぢふの　つきすむ空に雲もなし
玉葉雑秋　見わたせば山のはわかれゆく　つきせむものかたの　後大納言忠基
拾遺雑上　われのみやさびしき宿に秋の夜の　つきすむあたりもあれば　崇徳院御製
千載夏　ありあけの月に風の吹きそふの　つきすむ里のあまのとま
後撰恋　今ぞしる月の光ももろともに　つきせむ我身の秋ならで　康資王母
山家集下　神無月谷にぞ雲はしぐるらむ　つきせむ身のかなしさ
同　さえわたる月のひかりにみやこ人　つきせむ秋の嵐に
同上　さびしさにたへたる人のまたもあれな　つきせむ宿の秋の夜
後拾秋下　波の志賀の浦にて霧晴て　つきすみわたる夜はの月　光明峯寺入道前摂政左大臣
新葉秋下　あきの夜の山の嵐に雲さえて　つきすみわたる夜はの空　民部卿光資
山家集下　わすれじなかのみちのくのかよひけむ　つきにしらかはの水
新後秋上　雲かかる峯の梢の秋風に　つきさやかなる空の山　前中納言有房
新古恋四　わすれじなとちぎりし人の　つきすまむとたのまれし　伊勢
拾玉集六　いかにして人をわすれむ　つくづくとおもふこころに
風雅恋三　わがせこにかくやはありし　つきはうき身のなほぞかなしき　従二位行家
後撰秋中　秋の夜の月のひかりしあかければ　つきはわすれぬ人のこころ　在原元方
新古雑上　秋の夜の月のこゑをきてみよ　つきもろともに　大中臣能宣
新後拾雑下　今ぞしる月の光のあはれさの　つきは何世にありとも知らず世よ　如空上人
後拾哀傷　ありし世のあきの月影秋もいかでか　つきは都のみやこ人をもいかでと　法印行深
新勅秋上　ふるさとのあさぢがすゑの　つきもとなき人をこひて　左京大夫顕輔
長秋詠藻下　すゑの世をばすてがてにのみ　つきはあはれにてらすらむ
拾玉集六　ながめつつおもひにきゆる　つきは秋の夜のまの月
新後拾雑秋　織女のちぎりかはらぬ涙よりも　つきへてこよひの袖やぬれけん　後二条院御製
拾玉集二　ゆくへもしらぬおもひのけぶりに　つきよとまりてあき風の
同七　萩の下葉の露はおちても　つきよとおもへばかなしきに
新千秋上　あきの風の音にぞおどろく　つきよみの庭の萩原　前内大臣
壬生二百首上　ゆくへなきしらぬおもひの　つきまたあかぬ秋の夜
同　あはれともいふべき人は山のおくの秋の夜の　つきはまたあかずこそ
玉葉恋二　あはれにもおもひし人にかたらひて　つきよみてむかしを思ふ人　人麿

壬生二本上　おきてゆく人はこれ迄も清袖を　つゆはわかるゝ槙のしたかれ
新後撰三　暁の床は常葉のためならは　つゆはわかれの涙なるらん　大納言通具
拾玉集四　宿ちかき山しけ山の浅茅原　つゆはしけくて月をみんとや
新千載羇旅　旅衣かさねし草の枕のすゑは　つゆはかゝしく袖の月かけ　源基氏朝
続後拾遺　秋をさそひかさねて夜はたえ　つゆはこほれてゆく駒なき　侍従隆教
拾玉集二　鴫たちぬれは浦さひしきの秋の　つゆは袂にまかふ人いつ
新拾雑上　袖ぬれて月もかはらぬ秋の夜の　つゆはたゝりとの末にぬれつらん　隆覚法親王
月清集上　さゝ山の端のかたの月影みて　つゆはそゝうたて袖のそてかな
続千秋下　まさきちる雲のかくも明やて　つゆはそやゝ深入ぬ月かけ　津守国道
新後雑上　風のおとは木の葉ゆふへの草のかの　つゆはそあさちはふ見へぬから　藤原朝宗
拾玉集六　世へてふる露の下葉の雲の物　つゆはみなちる秋の草は
拾遺愚草上　冬まつらん時のしらゆきあさ荻の　つゆはよつゆのこほる秋の
新後拾秋上　あき秋さてそ秋の花野のみたれ衣　つゆはまちせて野やかはし　藤原頼輔
拾玉集六　今よそに袖とおもひける床の　つゆは涙ちする秋そかなる
続後拾秋上　秋はうつろふかたりけれみちるらん　つゆはふけその嵐の山せ　前大僧正慈超
新続古秋上　明ゆく野辺の嵐の清らかる　つゆはたかれてちるひく萩　前中納言雅孝
続千雑上　さのこおもと涙のもとくからん　つゆはもぬるゝ老の袂そ　紀宗信
山家集上　乱も吹の人の萩のなかりて　つゆは吹も袖とそなそなかる

新拾恋二　いつはりのよしや涙に移るとも　つゆのかゝらぬ袖とこそみれ　紀乗法師
新続古今　あきかせのかよひぬる草の原の　つゆはちるこの夕くれの月　権中納言為重
壬生二本上　君待つ秋の野もせまりてとらん　つゆもとまらぬ袖はありやと
千載恋三　旅衣かへるや草の露ならて　つゆはかゝるをかこちさきぬれ　備部光雅
新続拾神祇　玉津島たちかへるうら波の　つゆもみくまのゝ宮の里人　前大僧正慈海
拾遺愚草上　冬さらの雲吹風の時のまゝ　つゆもわすれぬ秋の京
新勅秋上　夕まくれ荻の葉の袖を花ちりき　つゆ涙あへぬ秋はきにけり　源具親朝臣
新勅秋下　秋の夜をあかしかねてそ暁の　つゆと起きゐてぬるゝ袖かな　前関白家肥後
新千恋二　うらみても君はつれなき山の　つゆと起きゐてぬるゝ袂そ　本院侍従
新千恋四　おきわけて君はいぬる人我はかり　つゆとおきゐて思ひあかしつ　平貞文
伊勢物語　白玉か何そと人のとひし時　つゆとこたへて消なましものを　在原業平朝臣
新古哀傷　ちるとかは何そと人のとひしとき　つゆとこたへて涙にまかふ
玉葉雑四　消ぬまの身をもしるしる朝顔の　つゆとあらそふ世をなけくかな　崇成親
拾遺愚草中上　ひとりきくちる木にすゝむも袖ぬれて　つゆときくぬる秋のはかなき
千載恋二　夜とさへいかは恋しくならまし　つゆはものゆゑあはれなる秋　二条院内侍参河
続古秋下　うつかれて下葉色つく秋萩の　つゆもち風にかゝる世　中宮大夫家房女
風雅雑上　田の庵の末や野路の露ならて　つゆぬるさもひとりはいなの原　深心院関白基平
壬生二本中　人は今いかに我もかれなん　つゆとのこさん荻の夕かせ

新後拾秋下　ぬきとめて玉にもやせん我袖乃　つゆにみだるゝ秋の夜の月　信實朝臣

新後拾秋上　雲とをき宿にもかゝる月影や　つゆとみのかせ秋の夜の秋かせ　前中納言為藤

玉葉秋三　ぬれてほす袖にはあらぬ我袖の　つゆをはらひてよるかな　建礼門院右京大夫

新古羇旅　思ひきやまくらの草の袖の上の　つゆをみにかけん我身とは　上東門院

同　あさぢふにちかくやどりて秋風の　つゆをかゝみと思ひけるかな　周防内侍

拾遺愚草中　夕まぐれ風の涼しき秋風に　つゆをこゝろへやどる月かけ

後千五百番三　思ひいでゝ秋のたのみもなきものを　つゆをかさぬる袖のうへかな　紀淑氏朝臣

同秋上　月影をまつ雁の花の色に　つゆをかさねて咲るあき萩　法印定為

新古秋上　おほかたの秋のねざめの長き夜に　つゆをかへす秋のよの風　源具親

月清集上　時しもあれ野べのあはれをしらせけり　つゆを我身にそへてかへる人

新葉秋下　秋風のふきしをりたる浅茅生の　つゆにやどれる月を見るかな　貞子内親王

千載羇旅　我袖にやどるは人やあはれとも　つゆをなみだにやつしけん　皇太后宮大夫俊成

拾玉集六　旅衣の袖にやどれる月かげの　つゆにくもらぬ秋の夜の月

後拾秋上　七夕の袖にやどれる月影の　つゆそてに袖も今朝はほすらん

山家集下　おもはずも置わかれぬる秋のよの　つゆにうつりて袖の露けさ　修理大夫顕季

風雅秋中　さぬるよもあかつきさむき　つゆとおなじく雪もこそふれ　徽安門院

拾遺愚草上　都出て朝たつ山の夕けぶり　つゆとみえぬ秋風ぞ吹

壬生二集上　月ひとつのみならず秋は秋よ　つゆときえても千代ともがな

同下　あきらけき人の形見に秋はきて　つゆとさきだつ秋のかり

新勅秋上　まくらもとにしのぶの袖のうへにも　つゆとさそふ秋のはつ風　宜秋門院丹後

壬生二集中　初秋乃一夜ばかりのから衣　つゆさゆる秋のはつしも

拾玉集七　よる人ぞあはれなる宿のあさぢふに　つゆにをきそふ虫の音ぞする

桐火桶　いかにしてたのめしほどの　つゆをとふ秋のみ空の人

後撰秋中　をりてみば袖もぬれけん秋萩の　つゆやあはれと秋のよの月　よみ人しらず

新千羇旅　旅枕ゆふべの秋の　つゆもをきそふ夕暮の山　皇太后宮大夫俊成

後拾雑秋　わすられぬ老の涙の秋ならば　つゆとおきてや秋はくるらん　前大納言経定

壬生二集中　我宿の一村萩の秋の夕暮　つゆのおきてまがふ夕の月

風雅雑下　思ひいでも袖のうへに　つゆとなるまゝ秋の夕ぐれ　従三位隆博

月清集上　萩がえもかはる袖の上のつゆ　つゆおきて秋の夕暮の衣

壬生二集上　まがきの萩にうつろふ　つゆもわけぬ秋の夕暮

新古羇旅　思ひをく人のこゝろにまかせても　つゆはらふべき秋の夕暮　西行法師

新後秋上　風にさへむすぶ夢の秋の　つゆけきあさの袖の上　法眼慶融

後拾秋上　待よひもなき我身にや秋風の　つゆにしほるゝ秋のゆふぐれ　皇太后宮大夫俊成女

拾玉集四　八千年のまつ萩の花をおきて　つゆのわかれも秋の夕暮

若草　見る人もなくてあれたる宿のうちに　つゆはけはひにけり夕ぐれ

新後拾雑中　松あらしみやこにうつる吉野山　つゆはけしきまつのした　二条法印定為
新葉恋一　むすほれしゆくへの空をなかめて　つゆはてしむなしき水茎　今出川院近衛
続拾遺羈旅　うつりゆく日数をかさねて旅衣　つゆはけうなき旅衣　前大納言為家
新葉秋上　咲人も袖かぬきしらぬ秋の野の　つゆはけてあさき納めの露　文貞公女
新続古今羈旅　都思ふ人の面影月にみて　つゆはけあらしにかゝる衣手　中務卿宗尊親王
続後撰恋五　わすられてあらぬ身のはての空をなけ　つゆはけゆかしむなしき袖　高陽院木綿四手
拾遺愚草上　草葉わけやそての袖をかゝる　つゆはり袖へ今もやとれる
壬生二百首中　つくらみぬ遠山まれむすされは　つゆかりそ衣はそてあさき
新古恋三　かりそめの庭の夕暮草枕　つゆかゝるまやかなしき　よみ人しらす
同恋二　ちゝすれは袖のしつくにしほれつゝ　つゆかゝるきと袖のへくに
千載恋一　我恋は昔の園のまゆけるを　つゆかれたる人の袖　皇太后宮大夫俊成
新葉恋五　かゝひとへ今はまかしけれま　つゆかれてと契やすせし　太中臣定雅
続拾遺恋　草のはらまよふ袖の心ならへ　つゆかゝらむと思ひけるを　新宣陽門院
新後拾遺春　水草の岸のうら風に村雨ま　つゆさけてまちあらめかも　選子内親王
続古雑別　古はむかしの庭のあとも　つゆかひて袖のよそ　平貞時
新拾遺羈旅　秋の旅もあまのかりそめに　つゆかゝる袖の干まもかは　従二位為長雅
新古今冬　霜ぬる袖をも散りのまかき　つゆよりかの君の月　為兼朝臣
拾遺愚草員外上　ちかよるゆきの秋の月をかたみて　つゆかゝる人の月をもをちて　前関白

月清集上　夜をあへしやまふかき　つゆかゝる心も風かゝ(る)　曽禰好忠
新古秋上　旅寝して見し夢の枕の頃もよ　つゆかゝりける月のあと
山家集上　あへて我はまふかき世をえたまし　つゆかゝるとはそてそへて　寂蓮
新勅撰羈旅　旅寝せし山の曙ぞいとかなし　つゆかゝるも袖にやあまり　今出大政大臣
新後羈旅　古里にそへて思ひし草枕　つゆかゝる心のうちにさえ　法眼源兼
新古冬　妙なる時雨もしつ山風　つゆかゝるかきらは乃葉　藤原為冬朝臣
拾遺愚草上　松むしの声を老ぬる秋の夕暮　つゆかゝる月の名にけり
玉葉雑四　月夜よみ秋のかつらの秋風に　つゆそなてのをはかりあん　玄輝門院
玉葉雑一　月影よかかる人の夜かさら　つゆかきもそむすひわたり世に　藤原家朝
山家集上　かわかぬよも袖をぬらす人のさよ　つゆむすはれてそらうしに
月清集上　一夜にも宿る人のたちまちとそ　つゆむすひそむすひ我をも
葵　きみならてちゝりけめりと　つゆちらしてそれをもかも　家
続後拾遺恋　小山田の庭もかんむかしの　つゆちらしひとつ袖のぬれまも　今出大政大臣
壬生二百首上　荻咲を籬にうつしたち絶る　つゆもけしのそく雀かへり
新後夏　夏草のかつらにあへる　つゆのかゝるとあかつきの　西大臣
拾玉集四　松かせの道もいかにも絶にけり　つゆかゝる中に野につきにけり　前太政大臣
続後撰雑　今そしるあかむらさきに君恋しや　つゆかゝるさりものに　従二位行意
後撰恋五　あひ見ての後の心にくらふれは　つゆかゝるものちにそ有ける　よみ人しらす

続撰雑三　あらく人の心もしらぬあきをと　つゆのいのちそかゝりける

続千恋二　あきのつゆかりのやとりに　つゆのいのちをたのみてそまつ　二条院讃岐

続古恋四　あはれとも今やとはまし（ママ）かゝりてそ　つゆのいのちのをしくもあるかな　季成卿

続後撰恋三　あひみんと何かたのみしいのちそは　つゆのいのちのかゝるちきりに　前参議教長

新古雑中　草の原しらぬ人のうへにもあさきむ　つゆのいのちのかゝるうきよに　前大僧正慈円

山家集上　月のすむあさちにすたく虫のねに　つゆのいのちもをしきよもすからに

拾玉　なにゆゑと思ひもわかて秋もなき　つゆのしつくも秋をたのみて

拾遺雑下　秋はきのはなのうへにおける　つゆのしつくもうらやましき

新古雑上　女郎花ひとり見るへき秋ならねは　つゆとともにやちらん　たかみ子

拾玉集四　あらみちも秋の袖のうへに　つゆのけしきもそてにたまらす　源宗武卿

拾遺雑上　もゝしきのうへにあらはれ　つゆの光そ袖の上に

新後恋四　むかしへや今もこひしき　つゆのたまるもやとりつゝ　順中宮

続後撰冬　世をあたにしのはんと思ふ　つゆのかたみもなきにしあらす　法皇御製

続古恋四　ほのかにもそれとしられて月かけの　つゆのかとはさそふらん袖のうへに

夕顔　あさかほの花のしつくもなかりけり　つゆのかとりはおもふなりけり

壬生二条下　夕暮のはなのうへに秋の　つゆのかとまたはかなき　仁和寺後入道法親王

千載夏　山川のおとにそ秋のしるしにて　つゆのはかなさはなにか又おもふ

壬生二条下　わすれゆくうつろふ花のうへにおく月かけの　つゆのはかなさのたのみもなく

新古秋下　ひとりすみ秋のふかさもたえかたく　つゆのもろさにやとる月かけ　寂蓮法師

新葉恋五　かれはてゝおなし心のかよはぬよ　つゆのいのちをなにゝかけまし　武蔵　惟成親王

続後拾春上　さほ姫のかすみの衣のうらかけて　つゆのたまぬく青柳　山階入道左大臣

同　青柳のいとみたれてもうちはへて　つゆのたまぬくたもとにそなる　壬生忠見

新拾哀傷　たまゆらとおもひしものを　つゆのきえなん　後入道一品

拾玉集五　秋といへはなかめてのみ　つゆのあはれもそてにしくれて

新千雑中　月をみてあかしかねける　つゆのかたみの袖のうへに

新古秋下　いつもあはれなるあさちの　つゆのなかにかはるあき

続秋賀　ひとつなきをもかしこき君か代に　つゆのふかきちよのかすかな　大江広重

拾玉集七　わかなつむ野への霞のしたにも　つゆのしつくの袖にかゝるらん　武子内親王

続秋冬　をしなへて枯野のすゑの　つゆのかことのなきにしもあらす　同

山家集下　このかみのもとにすむ　つゆのかたみの衣もかは　太宰大弐重家女

新秋雑　みのうちのあはれをしるや　つゆのなさけもかゝるよに　大僧正行尊

拾玉集一　世の中は草の葉におく　つゆのうへもかはらぬいのち

大和物語　うちつけにしなはと思ふ　つゆのいのちそかなしき　後西園寺入道前太政大臣

新千秋上　神なひのもりのしたくさ　つゆのやとりも秋の月

壬生二条上　あつまちのあさちかすゑの夕月　つゆのやとりも秋かせそふく

新拾雑上　秋されはまたしくるゝ　つゆのたまのをとのうへに　源高嗣

新拾雑上　風ふけはまたふく風に　つゆのみやたゆたふらん　前大納言隆定

後撰恋五　こひしさも身にそ霜なる成ゆけは　つゆのやとりもあらしとそ思ふ　よみ人しらす
壬生二百中　あきのよの人はみなからこそ今日見れは　つゆは宿をもわかしおく秋　前大納言為世
新千秋下　初霜のをきまよふ人ぬれぬるを　つゆもかくこそおもひきえけれ　昭慶門院一条
續拾　さらぬたにかはらぬ秋の野辺の色に　つゆをあはれと我よりもや　寂蓮法師
新千秋上　吹むすふ野へのくさきの秋風に　つゆみたれぬる袖やかわらん　前右大臣
新後羇旅　月うつる袖のうらなみたちかへり　つゆのをきてもこゝろ草枕かな　権大納言為信
新葉恋五　おもひてもおもはぬ人の昔にて　つゆわすれぬをかたみの宿　新待賢門院
続後撰秋上　雨そゝく秋の下葉をいろつきて　つゆのをく秋のものこるとも　皇太后宮大夫俊成
新葉秋上　萩の花さくやいまはときの　つゆのかゝる庭の萩原　入道前太政大臣
新後拾秋下　ゆふまくれ月のさしてもみゆるかな　つゆのこゝろ山の端の花
新千哀　しかすかの月日のまみつ業の　つゆのあさけ光をまたし　宣旨
玉葉恋　草むすふ袖のみかはく蓮葉の　つゆのひかりもうつれはかなく
風雅草中　とくよむ出る人もあらそふさら　つゆのひかりも花の色も　源俊頼朝臣
金葉恋　この里も夕たちしてわかるさま　つゆのすゝりぬ草のうへに　よみ人しらす
拾遺哀傷　草むすふ人のあはれをしのひ　つゆはすゝしく野もそれとなし　前大僧正道良
新拾羇旅　草まくらかりねの床の秋の袖　つゆやなをいかにそれとかはる　右大臣
続千秋上　さえのつる露わけわけて袖ぬれて　つゆやしらぬ秋の夕暮
後撰恋三　あはれとやあはて行かくれ　つゆやをきなんとおもひそむ　よみ人しらす

後拾遺秋下　うらかれの草のみちの露の　つゆやこゝにおもはてそあかん　源兼澄
新後拾秋上　さゆる夜の月こそ袖もあかさて　つゆまかるすゝきの野の萩原　前中納言定資
山家集上　秋のよをねさめにおもふすきし我　つゆ浦ふみあはせにまよひつゝ
月清集上　淺茅はら野中の宿の露けさに　つゆ浦ちかふまてつゆみつ月影　中納言
続古秋上　秋ありとふくかせの袖のはしをの　つゆけきかけのうき山のかけに
拾遺恋五　宮城野ゝ今はうつろふ花ずりに　つゆけきよ袖とこそなれ　延喜御製
後撰秋中　秋の野の色は花すゝきうすく　つゆまさるおもふ野へのことそ
夕葉賀　ちよふへきゝみかためにや君か代　つゆまさりけるそらの秋も
新続古秋上　さすらふ秋の夜月の影にかゝる　つゆは庭のつる秋風の萩　前大僧正慈鎮
新古今秋上　散ちらぬさきに見んとて秋の　つゆは鹿のなく野の秋風　後京極摂政
後拾遺秋上　かきくらしあれ行中のかへさに　つゆは花ちりにさはむ跡
玉葉秋上　立かへり袖のなかにそ見る月の　つゆはさらなるけしきかな
後撰雑四　いそてはつゆの山の萩原で　つゆはさらにそれともなし　西行法師
新続古恋三　一夜だにまたぬみだれの女郎花　つゆはさの夕の袖ぬれて
月清集上　床夏のひとりも露の所とて　つゆけさの夜の月も宿る　後京極摂政
後撰秋中　をりてみる袖さへぬるゝ女郎花　つゆけさに袖もいつはりや　右大臣
拾遺恋三　秋の野の萩のしけみの露の袖　つゆくのをくるるかな
月清集下　わけ入る野原の人の袖みれは　つゆ浦かくるゝ人に志らる

拾遺恋雑中　かつ人の袖すきうつてこそ老のみの　つゆふかき草の露のけしきか　伏見院御製

新続古秋上　あらしやあれ行野への浅茅原　つゆふかくこそ消えもせん　中納言

続古恋一　なかなかに思ひたえぬる袖の上に　つゆふかくあはれとみゆる秋の風　前大納言為定

新千秋下　おもひやる雨の夜すから涙のみ　つゆふかくむすふ袖のうへの露　皇太后宮大夫俊成女

続拾秋上　秋風は外山の裾に吹そめて　つゆふかくむすふ秋の初風　光明峯寺入道前摂政左大臣

同　はきらすにたえぬる者の秋をしもせ　つゆふかくむすへる秋の嵐　輔仁親王家甲斐

新拾秋上　秋ふかく入ぬる山の秋萩に　つゆむすふおもふにたへぬ秋の嵐　式子内親王

風雅秋下　さそはれぬ袖さへ今宵露けしや　つゆむすふおもふにたへぬ吹枯

月清集上　とはれぬ庵乃秋ちかき萩原　つゆ吹はらふ山おろしかな

風雅雑上　村雨の晴行跡のやまのはに　つゆのこりたるおもかけのかけ　読人不知

続古秋上　きゆるとも消なん後の秋萩　つゆふかきおもふも袖の涙さき　大貳三位

続拾遺秋上　ながめつつあかぬ秋の夜なかく　つゆふかきおもふ秋の袖の上　伊勢大輔

新続古羇旅　ねさめする旅の枕に置そふる　つゆふかきみつの涙にしほるるは　徽安門院小宰相

続千恋五　秋風のふくにつけても涙のみ　つゆふかきみちの秋のかせ　安嘉門院大貳

千載恋二　世とともにつれなき人を恋ひわたる　つゆこほれ落る秋の袖の上　藤原朝臣

続拾遺秋上　草枕かりそめにしもあらぬかな　つゆけさに我身を思ふ身の上　大中臣能宣朝臣

続古秋上　今宵こそ月もさやけき秋の夜の　つゆはらふ秋の月影　中務卿親王

玉葉雑二　深くとも袖のまのみえて　つゆこほれなからふるさとのそら　前中納言定家

続古秋下　足引の山田のいほに秋ちかき　つゆもとまらぬ秋風そ吹　行念法師

新葉恋四　あつさにてやむへくもなき恋の道　つゆあまたかさぬる袖のなみた　久貞公

月清集下　まれなりし旅の衣の袖のうへに　つゆあまたおもふ秋の夕暮

拾遺恋雑下　うちわひてひとり寝る夜の涙かな　つゆあらはなる竹の葉の月　雅成法師

千載秋下　網代木にいさよふ波の夕くれに　つゆさへかかる秋の夕暮

壬生二百首　夕暮はもの思ふことそまさりける　つゆさそふ秋の野原の夕暮　萩原為綱

玉葉夏　みしよりは雲ゐの月もかはりけり　つゆさえかへる秋の夕風　平兼時

続後拾秋下　いとしくあはれを袖にそへて　つゆさえかかる袖の夕暮

続後拾恋五　かはらぬもおもふかひなき暁の　つゆさえかかる袖のうへに　よみ人しらす

新古哀傷　今はただ秋の夜風に萩原の　つゆさえあまる袖の夕暮　皇太后宮大夫俊成女

風雅雑上　ふかき山のおくにすみける白雲の　つゆ見えてこそ床そ寒けれ　明道法師

新拾恋四　たえぬ山のかけにかかれる露草の　つゆきえてこそさやかなりけれ　花園左大臣家小大進

山家集　山里はひとのこころもすみかねて　つゆしくおもふにあかつきの月

拾遺別　君をのみおもひこしちの白山は　つゆしけきあかつきの空　よみ人しらす

新勅恋二　みし山の風けの袖をそめかねて　つゆしけきあさのあかつき　伊勢

千載恋三　おもへともつれなきものをなけきても　つゆしけきやとの夕暮　読人不知

長秋詠藻　ひとりねの床のさむしろ初秋の　つゆにやとれる月のかけかな

続後拾秋下　水のおもに月のすむなる秋の夜は　つゆもおもはぬ秋の夕暮　後宇多院御製

続後撰秋下　秋されはおりふしみせんと挿し萩　つゆしもさえて落はけりけり　人丸
新千秋上　浅茅生のちかきはちかの原かけて　つゆまさむと鶉鳴なり　前中納言雅孝
玉葉集秋上　妻こふる鹿なく山の萩か枝　つゆしのさむこゝろそあらん　高円広世
新古恋三　雅経て君まつ庭は荒にけり　つゆよりほかに涙のみして　賀茂成助
新後拾秋上　草むすふ野辺の緑におく人はなし　つゆよりもろき袖のしつく　後西園寺入道前太政大臣
山家集下　あはれしき君このんのことゝなりて　つゆもちらさて袖につゝまん
続千雑上　思ひ秋もれいつかは風をたのまん　つゆのみおきてうつろひにけり　元大臣
新千名残傷　今はとてつゆもおもひをかけし身の　つゆもわすれぬ撫子の花　権中納言為明
拾玉集四　志らのうらはまゝみ（ゆふ）だちの　つゆもわすれす（こひしき）山のは
続千恋四　見れは秋そかれ行もあはれなり　つゆもしらすなれぬと思ふ　元大臣
続拾秋下　小山田の庵もる秋の衣手は　つゆもしほりし萩のはな　権大納言家長
千載秋上　ちりひとつのこるかせにみたれて　つゆもこほるゝ袖の上かな　崇徳院御製
拾遺愚草上　さくらゝにおもふことそとかつ　つゆもあはれぬ萩の初風
続千夏　夕まくれ末のはる風によるへなく　つゆもたまらぬ蝉の羽衣　為道朝臣
同恋下　あはれなる折々の花の風になく　つゆもはかなき身をいかにせん　前関白左大臣
続後撰羇旅　ありあけの月にかへりし旅衣　つゆわけ衣たちかへりつゝ　よみ人しらず
山家集上　岩清水むすふ木の葉に山水に　つゆもたまらぬ氷なりけり
新勅冬　ありし世の草葉のうへの露のなに　つゆものこらぬ秋のなこりに　入道左京大夫顕輔

久安百　いつれかはまてあかつきの今も立　つゆもわすれぬ人にかたらん
新古羇旅　こゝろし志ても岩ねをしきて　つゆもかはらぬ旅寝なりけり　西行法師
続千羇旅　深かき山陰の菊の花なほ残る　つゆもやとりしまちわひつゝ　前中納言定家
月清集上　みよしのゝ山のしらくもたなひく　つゆもしらてや今朝の霜
続古冬　浅みとりかくすも今朝の初霜に　つゆもはかなき秋の野の末　皇太后宮大夫俊成
続後撰秋下　うつろはんことをしらでや菊の花　つゆもまたすてかりける　源具光朝臣
東屋　あさきちに二萩のしたにおく　つゆもちりなん風そいたく　
続千雑上　世をうきに秋の木の葉をさそふ風の　つゆもこゝろをとゝめかね　入道二品親王性助
花宴　たのみにし紅葉のちりかゝりて　つゆもこゝろはしらぬ庭に
金葉秋　千年まて君かつむへき菊なれは　つゆもあたにはおかしとそ思ふ　源中太夫顕季
新後恋　なけきあまるこゝろの色をしのふまに　つゆもあたなる袖の上かな　前大僧正公什
続拾秋上　さらぬたに人なき宿の萩か花　つゆもあらそふ野辺の夕風　権中納言公守
山家集上　秋の夜の月はかりこそあはれなれ　つゆもあはれをそへてすまれし
新後恋一　いつまてか袖の涙をもらさしと　つゆもしられぬ山の下水　式部成良
続古恋一　恋わひぬ人のこゝろの秋の山　つゆもしくれも色まさりけり　前中納言定家
続後撰秋下　山かけの草葉のつゆをおきそへて　つゆもしくれもふかき山里　同
風雅雑下　思ひ出る老の涙のあはれさへ　つゆもわかれし袖にのこれる　後京極院大夫
新千哀傷　うきをしのふ世のさかれ秋の暮　つゆもしくれもふかくなるらん　法印定為

月清集中　秋の夕[illegible]かへて[illegible]　つもるも[illegible]人のあと[illegible]　入道前摂政[illegible]

新後撰雑上　我宿のあれしのまゝに[illegible]して　つもるも[illegible]　[illegible]

拾玉集四　秋の夕[illegible]　つもりすむ[illegible]

拾遺愚草下　[illegible]　つもるも[illegible]雪も[illegible]

風雅冬上　[illegible]山のさ[illegible]の[illegible]　つもるらん[illegible]雪[illegible]

山家集下　[illegible]人[illegible]　つもる[illegible]　藤原基俊

雅亭　[illegible]　つもるは[illegible]

山家集下　[illegible]　つもりつゝ[illegible]

拾玉集七　[illegible]白の[illegible]　つもるうき[illegible]

山家集下　[illegible]　つもれ[illegible]

拾玉集一　[illegible]山[illegible]　つもれも[illegible]

山家集下　何[illegible]　つもりける[illegible]

詞花雑下　[illegible]　つもるらん[illegible]　よみ人しらす

新勅撰二　[illegible]　つもりて[illegible]　唐河女王

後拾遺冬　[illegible]　つもるも[illegible]　前中納言定家

山家集下　[illegible]　つもるあ[illegible]

壬生二品中　[illegible]河の尾上の[illegible]　つもりそ[illegible]白雪

新続古今冬　八十まて我[illegible]　つもりつ[illegible]の[illegible]雪　法印浄弁

山家集上　[illegible]　つもりつる[illegible]白雪　藤原雅朝臣

新千冬　[illegible]の[illegible]　つもりける[illegible]　よみ人しらす

後撰冬　[illegible]雪[illegible]　つもりて[illegible]

新拾冬　秋[illegible]　つもりて[illegible]山の[illegible]月　[illegible]

拾遺員外上　[illegible]の水[illegible]　つもりて[illegible]

金葉冬　君か代[illegible]松の[illegible]　つもりて[illegible]海[illegible]　源俊頼朝臣

続古雑下　[illegible]　つもりて[illegible]雪[illegible]波[illegible]　前大納言為家

風雅雑中　白雪の八重[illegible]　つもりて[illegible]山[illegible]　後山本前左大臣

新続古冬　み[illegible]川[illegible]　つもりて[illegible]　正三位[illegible]

壬生二品中　夕[illegible]吉野の[illegible]雪の　つもりて[illegible]の新

新拾遺冬　[illegible]白[illegible]　つもりて[illegible]　前大納言為定

同雑上　[illegible]　つもりも[illegible]雪　夢窓国師

続拾遺冬　[illegible]雪の　つもりも[illegible]　平政村朝臣

拾遺員外　[illegible]　つもりつ[illegible]

新拾雑中　[illegible]月[illegible]　つもり[illegible]　津守国助

続拾遺冬　[illegible]月の　つもりまつ[illegible]　藤原隆長朝臣

新千恋三　[illegible]　つもり[illegible]　従三位成仁

新拾恋三　[illegible]月の　つもりまつ[illegible]人[illegible]　従二位雅宗

狭衣四　ことのみとけぬくれなゐのかくれ　つもるゆきこえぬ雪もきえぬ

新後拾冬　ちりまがふ宿にかくれてよのくれ　つもるとはなしにけふの年くれ　信実朝臣

拾玉集一　おくる身の老のき世の中に　つもるとみえし冬の雪　よみ人しらず

後拾雑秋　よろづのこと昔の秋の雲の色　つもるとしもおもひくれ　法印定為

後千冬　わすれ人のふかくて年月の　つもるとおもふはかなきかな　大中臣能宣

新後拾雑秋　かぞふればわが身につもる年の暮　つもるとしをしらぬぞかなしき　前内大臣

新葉冬　ながむる世の中はありとも雪の　つもるつらさのよりも猶　竹林院入道左大臣

新続古賀　おほかたの秋をもつもる月の影　つもるかひもなき年の数かな　冬雪中納言

同　あはれとも思ふ人なき松の下　つもるかずをもとめてかへらん　読人しらず

同冬　人はいさわが身ひとつの中なりけり　つもるとしもかぞへてぞしる　後鳥羽院

万葉十五　夜をさむみあさとをあけて月の　つもるこそこれはうきにてあり　大蔵卿為家

後拾冬一　思ふこと君もおもひてとしくれ　つもる月日をかぞへてそ　院弁内侍

玉葉冬一　我やどにつもる雪のはるもなし　つもる月日はかぞへつつ　永福門院内侍

後千冬二　松かぜもまつよにかはる年の暮　つもるとみえて宿なる　前大納言為重

続後撰雑上　いつとてもおなじ冬の年月の　つもるうらみもあらぬ　源親行

同冬四　冬のくもりそらもまた雪もつもる　つもるおもひにきえぬ　元輔

新千冬三　冬のつきあはれはかなきかげそ　つもるまつのむねにかけて　前大納言為世

新後冬二　ちりのはらのみつもる年の夜に　つもるまでおもふ中の夜の月　津守国量

同雑秋　山川のみなかみとほくくもりなく　つもるこのはもやがてかげさやけき　人丸

拾遺愚草中　あまたびもとしのくれぬる年月に　つもるもやみぬ月日は　従二位家隆

拾玉集冬　あはれとも思はぬ人のためにすら　つもる日ごとの年はくれなん　前大僧正慈円

新古神祇　年経ればかはらぬ年のくれにかけし　つもるかひなき身をいかにせん　大蔵卿有家

万葉雑三　山里は雪ふりつもるみちもなし　つもるみゆきのはかなき　藤原定家

拾遺愚草上　身をつもりつゝいくとせのくれ　つもるとしのおもひを　前大納言為家

続後古雑上　海士のかるもにすむ虫の　つもる月日の中の海も　前大納言雅世

後十冬　はるのねをたのむ衣の雪の　つもるかひなきもの　前大僧正慈鎮

壬生二百首中　あはれはあはれしはしのこのさめ　つもるかたみにかはる　前大納言資明

拾玉集四　今年よりわがよのはるの月日　つもる日ごとにをしむ年月　前大僧正慈円

万葉冬々　夕ぐれにこよひもみてよ春の　つもるあはれのかげの月　前大僧正良信

新後拾雑秋　こゝろをもなにゝかけてくらさん　つもるおもひのかたちぞ　藤原秀能

後千雑上　今はかの月の雪につもりて　つもるおもひの年のいつ　前大納言為氏

新後古雑上　秋をへてあはれわが身の年を　つもるとなきにかへる　津守国平

新勅雑一　ちりかへるかな山のかげ月　つもるおもひのはての月　侍従具定母

新千神祇　神垣やねきこともなくて年ふれは　つれなきまつはかくやゆへしき　津守国冬

続古冬　いとゝ又ふかくも人のなりにけり　つれなきゆきの深き山里　中納言為氏

続後拾冬　おなし秋の夜の月のすむさへ　つれなきゆふ日の山の関　大江貞重

拾遺員外　さらぬたに時雨とよそに聞けは　つれなき人の月をみる秋　あるしの家

古今雑上　大かたは月をもめてしこれそこの　つれなきこの月にみる物　なりひらの朝臣

伊勢物語　大かたは月をもめてしこれそこの　つれなき人の我身なりけり　在原業平

続後撰冬　年くれてかゝる雪の山路にも　つれなきひとのあとはかはらて　正三位知家

新後拾恋下　山人のふみ分けし跡もみえぬまて　つれなきこほりの白雪　御製

新後拾恋　待わひて十とせあまりの夜なよなの　つれなきこゝろのゆふま　参議雅経

新続古冬　雪ふかき雪もめてしこそおとするに　つれなき人のあきはてゝ世を　中納言為家

新勅冬　谷ふかき雪のとほれる跡みえて　つれなきとしもくれはて　中務卿宗尊親王

新続古雑上　和歌の浦や老木の松の古き葉の　つれなきことも今そしらるゝ　前大納言為定

続拾恋　世のうきにたへぬ心の我身ゆへ　つれなき人を猶たのむかな　法眼源承

玉葉雑二　をく月は松にも高くふけにけり　つれなきものは暁の空　一条前関白

新拾恋三　うきことをしのひし袖にまかせつゝ　つれなきか中の雲のうへ　前大僧正道玄

玉葉恋三　さもこそはちるやうらみもあらめ　つれなきかもと思ひけれ　従二位家子

拾遺員外　たのめおきしことの葉もなく年ふれは　つれなき人にうき身の程　後桂光院後宮

　年ふれてなほ身のうき契ゆへ　つれなきつまはなにとかうらむらん

新拾雑中　空にまつ月の影にもかれはてゝ　つれなき松の葉をもみしかな　法印長舜

続拾冬　谷ふかみむすふ氷の山陰に　つれなきゆきをつゝむ夜のまて　藤原頼氏

風雅冬　かつ消えつむ雪の庭のたえまにも　つれなくとまる霜の下草　前大僧上人

新勅恋五　かた思ひのうきよのなかのうらみをも　つれなきゆくすゑをしらん　皇后宮大夫正妃

玉葉冬　天の戸をあけてかたふく月かけの　つれなき雲の色をしらすや　小弁

続後撰秋下　ありあけの山路は秋のなこりにて　つれなきみちの月そのこれる　よみ人しらす

新続古恋三　いつまてと思ふ心にたくへても　つれなき人のたのみまされ　前中納言雅基

新拾恋三　ことのはにあはれをかけし人ゆへ　つれなきやまひとつらきよとそ　法印隆淵

続古春下　咲さかぬ花の木をいつかすめん　つれなきゝくの花の雪　大納言通具

新葉冬　冬きては木の葉のさそふ秋の色　つれなきかほのおもかけそ　よみ人しらす

新後拾恋下　風わたる尾上の松の木のまより　つれなき月もよもやかはるま　権大僧正

新千雑上　浅井まつ老となりても我よはひ　つれなきよりもかなしけれ　法眼慶運

新古冬　かきくらしあまきる雪の中にして　つれなきさとはいかなる　小侍従

続千恋上　神のちかひにまかせて雲もなし　つれなきそてのゆくゑ　法印定為

新千秋上　冬かれぬ竹の葉さやく月すみて　つれなき月をもしまぬ　後京極摂政前太政大臣

続千雑中　たつ鳥のたちわかれてしきみか身に　つれなきこそのなかめよ　前右近大将

続古哀傷　かなしさの数ともしらぬ霜そ　つれなきいのちをなにかたのまん　一条院中宮

月清集下　きみかよにあはぬためしも思ほえて　つれなきいのちとおもひしりぬる　後京極摂政

新拾遺和哥　よしあしの人の世中のことはりをしりてそいるしてたのみの人の道　源有長朝臣

国立公文書館
National Archives of Japan